2012年4月20日の授業へのコメントと回答

興福寺の阿修羅は実は怒りの表情を表しているというのが、今日の講義の内容であったが、たしかに奈良時代あたりまでの日本の美術の中に、筋肉が盛り上がって、鬼のごとき表情をしているものはなかったように思える。私は怒りと悲しみは少し似たもののように思える。どちらも己の内からわき上がる感情を堪え忍ぶことになるからだ。だから、古代の人は怒りをおだやかな表情の内に現したのではないかと思った。

「怒りと悲しみは似たもの」というのはおもしろい指摘ですね。一般には怒りの表現と悲しみの表現は、相当の違いがあると考えている人が多いので、阿修羅像の現代的なとらえ方、すなわち「悲しみをたたえた少女」というイメージに対して、もともとはこれが怒りの表情だったのではないかという、常識を覆す指摘をしたのですが、「怒りと悲しみは似たもの」というとらえ方は、そもそもその前提に疑問を投げかける鋭いとらえ方だと思います。仏像では怒りの表情を「忿怒相」（ふんぬそう）と言いますが、もともと、インドの仏像にはこのような怒りの表情を示した作品はほとんどありません。忿怒相の仏像が現れたのは、かなり時代が下って、密教が隆盛になってからです。日本では、密教は平安初期に空海によって本格的に伝えられましたが、それ以前の仏像には、密教特有の忿怒相がまだ現れないようです。このような歴史的な背景も、仏教美術を考える上では重要です。おだやかな表情で表すしか、当時の人々は表現方法を知らなかったとも考えられます。

今日の講義を聞き、そして資料を見て考えたことは、各国によって神のとらえ方というものは様々であるということがわかりました。インドの人々は無常観を受け入れず、神は絶対的なものであると、人と神を完全に別視しています。ですが、日本は神仏をかたどる仏像ですら、はかなき無常を求めています。日本はよく「信仰心がない」などといわれますが、これは仏像に無常観を求める日本独特の感性と関わりがあるかもしれないなと考えました。また、阿修羅のことをとると、謎が深まる部分が多々あり、日本人の宗教観にただただ疑問が残りました。

神々のとらえ方がさまざまであるというテーマは、この後の授業でもくりかえし登場する考え方なので、ぜひ、ご自身でも思索を深めてください。日本とインドで、仏像をどのようにとらえ、表すかが、この授業の重要なテーマです。無常については、すこし訂正すべきところがあり、インド仏教でも神や仏を無常と考えています。日本人的な無常観は、たしかに「はかなさ」といった風流なイメージがありますが、インド人にとっての「無常」はもっとドラスティックなものです。永遠不滅なものは何もないという徹底した考え方です。空（くう）の考え方も、これと関係があります。同じインドでも、ヒンドゥー教の神は無常ではなく、永遠不滅な存在なので、まったく別のとらえ方になります。「日本人に信仰心がない」というのは、私もよく聞きますが、あまり私はそのように思いません。基本的に、どんな国の人々であっても、信仰心はあるものです。その現れ方に文化の違いがあるのです。前回の授業ではいろいろ疑問が残ったとのことですが、まだ導入なので、気にしないで、聞き続けてください。宗教とか仏教がそんなに簡単にわかるわけがないのです（もちろん、わかるように努力はしていますが）。

仏像の怒りを表す技法の変化は、いったい、いつ頃あったと思われるのか、また、なぜ、そのような変化が起こったのか気になった。なぜ、寺の建立が多かった気がする奈良期ではなく、平安期に怒りのイメージが変わったのか気になった。

上記の回答のように、平安初期に怒りのイメージが変わったのは、怒りの表情を持つ密教の仏たちが、日本に伝えられたからです。寺院の建立は奈良期だけではなく、平安期にもさかんです。その多くは真言や天台の密教系の寺院です。平安中期ころからは、浄土教系の寺院がたくさん造られるようになりました。寺院の建立は、単に仏教のみで説明できるわけではなく、当時の政治権力や経済状況とも密接にかかわります。これは、寺院の内部に安置する仏像についてもあてはまることです。この授業では、このような社会経済史についてはほとんど触れませんが、歴史的に仏教美術をとらえるときには、重要な点となります。なお、仏像の様式や技法の変化は、歴史上、何度もおこりました。歴史の授業では、それを～様式というように習います。たとえば、天平、白鳳といった名称がそれです。高校までは丸暗記で覚えたはずですが、そのような様式の変化を説明するためには、さまざまな要因を考慮しなければなりません。名称だけを覚えても何もおもしろくはありませんが、その背景を解きほぐしていく作業は、とても魅力的です。

私は仏像が本当に大好きなので、宗教学Bがこんなにも私のニーズにこたえてくれるような授業で、とても感激しました。よく、京都のお寺めぐりをしているのですが、広隆寺の半跏思惟像や六波羅蜜寺の空也像や、永観堂の横向きの仏像、泉涌寺の楊貴妃観音像がとくに大好きです。阿修羅像は日本史の教科書でしか見たことがなかったので、後ろ姿があのようになっているのは驚きでした。いつか生で見たいです。マンガのブッダやキリストを実際の仏像でひもとくところが、とくにおもしろかったです。この授業を取って本当に良かったです。来週のインドも楽しみです。

熱烈なコメントをありがとうございます。仏像好きな方が受講してくれて、私もうれしいです。仏像を中心とした授業なので、おそらく楽しんでいただけると思います。コメントにあげてくれた仏像は、いずれも重要な作品ばかりです。永観堂の横向きの仏像は、阿弥陀如来で、帰り来迎を表すといわれています。仏像鑑賞について、授業では少し皮肉な見方を示しましたが、基本的には、多くの人にその魅力を知っていただきたいと思います。日本もその他の国にも、すばらしい仏像は無数にあります。それらは単に見るだけでも十分楽しめるのですが、さまざまな知識をそなえて見ると、さらにその魅力を深く味わえることになります。この授業を受講すると、それまでとはまったく違う見方もできるはずです。ぜひ、楽しみにしてください。

先生のお話しされていることの重要さが、私の知識の少なすぎるためにわからず、残念でした。まず、なぜ、阿修羅について、そんなに深く追求しなければいけないのでしょうか。阿修羅とは誰で、当時の人たちや仏教において、どのような存在だったのか、私は知らなかったので、今日はつまらなかったです。また、怒りを表すことはそんなに難しいのでしょうか。この像が怒っているかどうかはやはり、作った人の心を見てみなければわからないだろうと思いました。時代背景とかその人の人生とか、何かいろいろ知りたくなって、私はこの講義に向いてないのではないかと思いましたが、あまり難しく考えず、私は寝ないでがんばろうと思います。

前の方のコメントと正反対の内容なのですが、基本的には私はそれほど違わないと思います。「つまらなかった」のは残念ですが、コメントに書いてくれている「当時の人たちや仏教において、どのような存在だったのか」とか「作った人の心を見てみなければわからない」というのは、私もそのとおりだと思います。ついでに言えば、作った人の心を見てもわからないこともあり、それを考えることも必要です。時代背景や人間の思考を知りたいというこだわりは、この授業での私の問題意識そのもので、この講義の趣旨にぴったりのはずです。もちろん、寝ないことも大事なので、おっしゃるとおり、あまり難しく考えず、ぼちぼちお付き合いください。

2012年4月27日の授業へのコメントと回答

絵は描く人の意思が反映されるというのは、高校の時ならったルネッサンス以前の西洋人は、遠近法を使って描かなかった（神の目線で描いているから）というのと同じだと思った。心の中のことが表現されやすいという点で、絵と宗教的な考えは結びつきやすいのかもしれないと思った。

「絵はありのままを描いたのではない」は、この授業の重要なテーマで、後半取り上げるマンダラのときにも強調する予定です。頭の片隅にでも置いておいて下さい。遠近法は美術史の大きなテーマで、さらに哲学や思想とも結びつきます（パノフスキー、E. 1993『＜象徴形式＞としての遠近法』木田元他訳 哲学書房という古典もあります）。コメントの中で言及されている遠近法は、消失点を持つ線遠近法のことだと思いますが、われわれにはそれが「正しい絵」という思いこみがあります。しかし、絵画の歴史の中で、線遠近法が守られた時代というのは、きわめてわずかです。その代表的な時代がルネッサンスなのです。いいかえれば、線遠近法で描かれた絵画は「特殊な絵」なのです。「神の目線」については、コメントと逆になりますが、線遠近法で描くことで、人間は神の目線を手に入れたと一般に言われます。世界をとらえる視点が大きく変わり、ここから近代的な思考や世界観が生まれたと言われます。絵と宗教が結びつきやすいという指摘はそのとおりです。宗教美術の場合、描く対称が「聖なるもの」すなわち神や仏であることが当然、多いのですが、そこで用いられる表現方法は、それ以外の芸術とはことなる特徴を持っています。この後の授業でそのあたりを詳しくお話しします。

最初に詩があって、作者がそれに地の文をあてはめていったので、どれが本当なのかはわからないと聞き、ではきっちりわかっていることはかなり少ないのか? 仏教の歴史は案外いいかげんなのか?と思った。

がっかりするかもしれませんが、人間の歴史というのは、どれも本当ではありません。高校までの歴史の授業では、すべて「事実」として学んだと思いますが、すべて、後世の研究者が、それぞれの歴史観にもとづき、「そうであろう」と考えたものです。もっと言えば、人間のわかっていることで、「絶対に正しい」ことなど何もないのです。だから、研究する価値があるのではないでしょうか。仏教の歴史もその一部で、それを少しでも知りたいと考える人が、文献をはじめとするさまざまな資料を研究するのです。それによって明らかになったことが「いいかげんなこと」かどうかを考えるのは、それをどのようにとらえるかというわれわれ自身の意識にかかわる問題です。

僕は小さいころに手塚治虫のブッダを読んだことがあります。非現実的なことが多々あって、どこまで本当か知りたいです。ブッダの世界ではインドなので苦行があり、差別があり、これもどの程度までが本当かも知りたいと思いました。「ブッダ」では主人公のブッダと同じくらい、タッタという盗賊がよく出てきましたが、かってはそれほどまでに重要な人物だったのかも知りたいです。

手塚治虫のブッダは、皆さんの中でもかなりの割合で読んでいるようなので、取り上げましたが、私自身は手塚治虫のマンガの中では、それほどできがいいとは思いません。基本的なところに、差別や階級闘争があり、おそらくその背景には、日本の戦後の政治史の問題があるでしょう（手塚と共産党とのかかわりもあります）。「ブッダ」の内容のどこからどこまでが手塚の創

作であるかは、仏教の歴史を少し勉強すれば、すぐにわかります。ちなみにタッタは全くの創作で、手塚らしいキャラクターです（とくに小さいときのイメージ）。主人公やそれに準ずる登場人物に、このような子どもを配するのは手塚のひとつのパターンで、「ブラックジャック」のピノコや「どろろ」の中のどろろなどがあげられます。ちなみに、後者の「どろろ」の主人公は百鬼丸のようですが、あえてどろろにしたところが手塚らしいところです（ついでにいうと、それが男の子ではなく女の子であるというのも手塚です）。

口承文学という伝え方によって、釈迦は自らの教えを伝えましたが、口で伝えることで、記述で伝えることより利になることが何かあるのかと疑問に思いました。記述で残した方が正確な伝説が残り、釈迦の権威が付けられるのではないかと思いましたが、そんなあいまいなところも、日本人の性質にあるのではないかなどといろいろ考えが広げられそうな授業でした。

仏教の教えが、口承で伝えられたことに関しては、いろいろな理由が考えられます。コメントの中の考え方とは逆になりますが、基本にあるのは、口承はきわめて正確だということです。ギリシャのホメーロスによる『オデュッセイア』や日本の『古事記』などは有名です。逆に、文字に記したテキストは、書き誤りもありますし、意図的な改竄（かいざん）もあります。記録がすべて正しいというという考え方にも、一度、疑問を持った方がいいでしょう。それに加え、インドでは宗教的な文献は文字ではなく、口承で伝えるという大原則がありました。そのための緻密な記憶法もありました。ヴェーダの聖典がその代表です。残念ながら、インドの場合、「あいまい」ではないので、口承という方法をとったのです。

No. 3のブッダ最後の旅は、それを編集した人間が梵天などのイメージに合わせてあてはめたものだと聞いて、現在の日本の宗教観念が、ごちゃごちゃなのと同じような感じだったが、それが編集者の意図的な技法だと思うと、おもしろいと思う。ただ、どの詩にも共通していることは、死について嘆き悲しむ様子なので、本来の「ありのまま」の姿ではなく、その場面の雰囲気がありありと伝わった。

文学作品も芸術作品も、作者の「たくらみ」を反映していることを確認するための素材なので、理解していただいてよかったと思います。ただ、上の方のコメントにも見られるのですが、日本人の宗教観がごちゃごちゃとか、あいまいというのは、おそらくいろいろな機会に読んだり聞いたりしたことだと思いますが、本当にそうでしょうか。どこか別の国の宗教と比較して、そのような特徴があると確認したでしょうか。私自身は、けっして日本の宗教はごちゃごちゃでもあいまいでもなく、筋の通ったすっきりしたものだと思っています。というよりも、宗教があいまいかそうでないかを判断するのは、とても難しいと思います。具体的な例を考えながら、他の国の事例と比較して、客観的に判断することが大事だと思います。大学の授業では、「わかっているつもり」というのがいちばん危険です。

2012年5月11日の授業へのコメントと回答

それぞれの象徴的表現は仏教以前にさかのぼれるのか、他の関係ないものに流用されたりするのか、意味の変化はあるのか疑問に思った。

初期の仏教美術にみられる象徴的表現が、必ずしも仏教に限定されないことは、この後の授業で取り上げる予定です。人間が用いるシンボルやイメージには、かなり普遍的なものもあります。その一方で、同じシンボルやイメージが、時代や地域をこえて伝達されていく場合、途中で変わってしまったり、あるいは意図的に改変されることもあります。そのときに、意味を変える場合もあれば、形を変える場合もあります。イメージやシンボルの変化から、文化のあり方を読み取ることもできます。

ゲルマン人の大移動後のヨーロッパでは、キリスト教布教のためにキリストの像を許可する国（地域）と、ユダヤ教からの教えを守り“聖像禁止令（レオ3世）”などで禁止する対立がありました。像の有無について、この場合は“布教”がターニング・ポイントになっているわけですが、仏教にもそうしたことが（上座部と大乗に分かれたこと以外で）「仏像」について対立があったのでしょうか。また、キリスト教（一部時代を除く）や仏教は像があって広まっていますが、イスラームは像がなくとも広まっています。日本の神道は像がなく他の3つと比べると広まっていません。こうしたことから考えて、“像”は本当に布教に影響するのか、疑問に思います。

仏教内部で、仏像を作ることを禁じたとか、禁じなかったとかいうことは、すくなくとも文献では確認できません。教科書の第４章でも述べたように、基本的に仏教を含むインドは、具体的なイメージを避ける傾向があります。宗教美術における「布教」という視点はおもしろいですね。授業ではほとんどふれませんでしたし、この後も取り上げる予定はありませんが、たしかに注意すべきポイントだと思います。広く見れば、イメージの機能や役割という問題にもなります。仏像や神の像が単なる礼拝の対象ではなく、何らかの役割をそこに与えることも一般的です。説教のときの重要なアイテムになったり、儀式の道具になったり、あるいは芸能と結びついたりします。最近は、美術作品をこのような広いコンテキストで位置づける試みも、さかんになってきました。単に絵画や彫刻を芸術作品としてのみ扱うのではないのが特徴です。イスラームがイコン（偶像）を用いないことは、前回の授業でも紹介した「偶像崇拝の禁止」という用語とともに、ご存じの方が多いでしょうが、たしかに、イコンを持たないにもかかわらず、世界中で信者を擁しています。イコンに代わるものとして、イスラームの場合、私は建築が重要なのではと思っています。あるいはコーランのような「聖典」も、その位置を占めるのかもしれません。また、いずれの場合も、イコンは持ちませんが、きわめて精緻で豪華な文様があらわれます。これも、イコンにかわって、人々に宗教を印象づける役割を果たしているのではないかと思います。日本の神道が日本以外の文化にも広がるような普遍化をなしえなかった理由については、私はよくわかりません。皆さん自身でも考えてみて下さい。

前回の授業で見た涅槃の絵ではシャカは誇張された姿で描かれていた。そうすることでシャカの存在の大きさを示したのだと思った。だから今回シャカが偶像として表されていない絵を見て非常に大きな違和感を覚えた。しかしこの大きな違

和感こそが逆にシャカの存在を強く認識させるものではないかと思った。例えば私たちは普段あたりまえに有ったものがなくなったときにそれがいかに大切だったかを強く認識する。同じように日頃からシャカの教えを学んでいる仏教徒にとってシャカの存在はとても大きなものであるのに、それをあえて絵に描かないことで逆にその存在の大きさを強調していたのではないだろうか。

「不在」であることが、逆に存在を強く主張しているという見方は、おもしろいですね。見えないからこそ、そこに「尋常ならざるもの」を意識してしまうのですね。これも、教科書の第４章でふれた「見えないものの方が見えるものよりもすぐれている」という人間の考え方に一致するかもしれません。インドの仏教美術の場合、最初期からこのような「不在」を釈迦の表現方法として用いていることから、必ずしも、そこには「見えないものの偉大さ」は感じられなかったのではないかと思いますが、宗教美術の特質を考える際に、興味深いポイントのひとつになりそうです。

釈迦を表現する際にその場面が意図することに応じて様々なシンボルであらわしているというのは興味深いと思った。見たことのない人を完全に再現することはできないので、象徴的に表現するというのは神聖な感じもするし、熱心な信者ではない私でも絵を見ただけで分かりやすいので良いと思った。他の宗教でも同じような事例があるのか気になるので調べてみたい。

ぜひ調べてみて下さい。日本の神道でも、イコンが用いられないことは授業でも紹介しましたが、ユダヤ教もそうですし、初期のキリスト教もそうです。このような、よく知られた宗教以外にも、世界中にはさまざまな宗教があり、その大多数がシンボルなどを用いて聖なるものを表しています。むしろ、人の姿に似た形で表す方が少数派だと思います。仏像というのが、特殊な宗教美術であることがだんだんわかってくるでしょう。

今日のBGMは聞いたことはあるけど、タイトルはわかりませんでした。ぜひ教えてください。

J. S. バッハの無伴奏チェロ組曲の第１番です（流したのはそのうちの第5のPlaeludium）。ただし、チェロではなく、ギターで弾いています。演奏者のAndreas Von Wangenheimによる編曲版です。バッハはどんなシチュエーションでもよく合いますので、この仏像鑑賞スライドショーでも重宝します。「バッハの無伴奏チェロ」と、曲名をあててくれた方がひとりだけいました（番号や楽器についての言及はありませんでした）。他にも「バッハでは」という人もひとりいました。今回は別の曲を準備する予定です。

2012年5月18日の授業へのコメントと回答

最近の講義は話の内容が複雑になり、難しいと感じてしまいます。しかし、高校の倫理の時間で習った単語が少しでもでてくると、専門的な内容を勉強しているんだと感じます。インドから中国を経て日本に伝わるイメージに対する人間の思いはすごいと思います。孔雀や獅子に乗った仏像を初めて見ました。不思議な動物、想像上の動物も含め魅力があるのだと思いました。釈迦がつめたいという話に興味がわきました。インドの人々が再度、土に埋めた文化の違いがおもしろかったです。

できるだけ難しくならないようにつとめていますので、がんばってついてきて下さい。もしわからなくなっても、基本的に１回ずつ、テーマは完結するので、その次はリセットして下さい。高校の倫理と重なる部分もありますが、むしろ、そこで学んだことがいかに一面的であるかを感じてほしいと思っています。あるいは、もっと身近なトピックに感じられるはずです。仏像をまた土の中に埋めてしまった話は、あの写真をお見せするときにいつも紹介するのですが、私も、いかにもインドだなぁと思いながらお話ししています。

結局は仏を拝みたかったのに、空虚なものにして拝むというのは、仕方のない事といえども、本末転倒と言いますか、なんだかなぁと思いました。そう考えて、自分の事について、理系らしい考えだなぁとも思いました。教科書をある程度読みました。特に第一章は導入のジーニーの話が興味深く、「私」について色々と考えながら楽しんで読み進めています。

仏教の「空」（くう）と、いわゆる「空虚」は少し違うのですが、それはさておき、礼拝の対象を空とみなすというのは、仏教では広く見られます。教科書の第４章でも書いたように、人は「目に見えないもの」の方が「目に見えるもの」よりも、すぐれていると考える傾向があります。仏像を空と見るのは、もともとはネガティヴなとらえ方なのですが、時代が下ると、空そのものがポジティヴな意味を持つようになります。本末転倒かもしれませんが、これも人間の思考パターンなのでしょう。教科書の第１章は、この本のなかでもとくに読者にアピールする内容だと思っています（そのために、冒頭においたのです）。このトピックは、もう少し先の授業で取り上げますが、先に読んでおいてもらうと、そのときの理解もよく進みます。「私」とは何か、というのが主題です。教科書も後半は少し専門的になりますが、前半は誰にでも理解できる内容です。

最初の飛鳥時代の仏像がシンメトリーということであったが日本人はやはり、アシンメトリーを好んでいるのだと思う。当時の人はシンメトリーなものを斜めから見ることで自分で対称性を崩していたのではないかと思う。そういう文化が古くからあったと思うし、現に写真もほとんどが斜めからであった。

シンメトリーを好むか好まないかは、たしかに文化に関係するようです。この授業の後半で取り上げる予定のマンダラは、もともとは完全にシンメトリーの世界でしたが、日本に入って時代が下るほど、シンメトリーから遠ざかっていきます。ただし、一概には言えず、日本でもシンメトリーな造形が好まれることがありますし、逆に、インドなどでもアンシンメトリーなイメージはたくさんあります。身近なところでいろいろ探してみるとおもしろいでしょう。

情けないことに、私はまだこの講義にどういう姿勢で取り組めばいいのかを、つかめていないように思います。ですが、講義冒頭の仏像スライドを見て、音楽がとてもマッチしていたせいか、心地よく感じました。インドの人々、仏像を作った人々も、安らぎを求めていたんだろうなと思いました。また、途中、先生が、「いい如意輪観音像がなくてスライドにのせなかった」とおっしゃっていましたが、いい如意輪観音、いい仏像とはどのようなものなのでしょうか。

気楽にとり組めばいいと思います。自分で言うのも何ですが、共通教育の授業の中では、おそらく、かなり楽な内容だと思いますし、それなりに印象に残る授業だと思います。避けてほしいのは、内職をしながら聞くことで、たいてい、わからなくなります。授業の内容は筋道が通っているはずですし、途中で、ひねりや意外な展開などを入れています。はじめの仏像スライドショーは、昨年から行っていますが、楽しみにしてくれている人がかなりいるようです。「いい如意輪観音」はたしかにあいまいな表現ですね。授業では仏像を鑑賞することが目的ではないので、造形的な出来不出来はあまり問題にしないのですが、如意輪観音そのものは、インドでは現存作例がきわめてわずかで、しかも小規模な作品しか残っていません。授業で紹介している作品の多くが、等身大やそれに近い規模を持つのに対して、ずいぶん見劣りがするのです。

遠くはなれたインドと日本で似た姿をしている仏像はイメージを伝えたからというよりも、むしろ姿が記号化されているように感じた。例えば、動物に乗っているような大きな特徴だったら分かりやすいが、手の向きのような小さなものだったら人が伝えていたらその間に変化してしまって、こんなにもうまく似ないのではないかと思う。なので、姿を特徴として伝えたというよりは、この仏はこういう形であるという記号のような認識があったのではと思った。

記号として仏像のイメージを伝えるというのはたいへん良い指摘です。密教の仏像の特徴は、次第に細部の相違にしか現れなくなり、その部分のみに変化を与えて、それぞれの特徴を生み出すようにします。このことは、今回お話しする「仏のイメージの画一化」と密接な関係があります。お楽しみに。

仏像の顔を見て、あまり新しくないと思いました。BGMはよく聞くのですが、曲名などは分かりません。この法隆寺の救世観音像は聖徳太子に似せてあると聞いたことがあります。金曜の2限に「フィレンツェの美術」という授業があって、キリスト教では中世に布教を広めるために聖者の像をつくった教会側に対し、ルター側が聖書のみをよりどころとしたということを学びました。どの宗教でも教えとイメージのせめぎ合いは起きているのだと感じました。馬頭観音像ですが、金沢の北方の羽咋市の豊財院というお寺にあります。金剛峯寺の孔雀明王像は石川県で展覧会があったときに見たことがあります。そのときは美術という点で鑑賞していましたが、この講義を通してその奥の背景も学ぶことができ、嬉しく思います。日本の孔雀明王はインドに比べ、孔雀を強調している気がします。孔雀は日本にいないので、より神聖さを出すという演出があるのではないかと思います。

BGMは前回の授業でも紹介しましたが、フランスの作曲家E.サティのジムノペティ第１番です。「フィレンツェの美術」は宮下先生の授業ですね。宮下先生は金大の文系ではおそらくいちばん有名な先生でしょう。宮下先生も私も同じ人文学類のフィールド文化学に所属しています。西洋の美術もあわせて学ぶと、さらに得るところは大きいでしょう。宮下先生は美術史や文化財学の大家で、授業ではオーソドックスな美術の歴史や、壁画の

修復の方法などについて学ぶことができます。それに対して、私は出身がインド哲学や仏教学で、どちらかというと、宗教や思想と結びつけて、美術をとらえます。そのあたりを意識して受講すると、より効果的と思います。豊財院の馬頭観音は、日本の馬頭観音の中でもとくに有名な作品のひとつで、私も豊財院の収蔵庫や展覧会などで直接、拝観したことが何回かあります。直立したユニークな姿の馬頭です。福井県では中山寺や馬居寺（まごじ）の馬頭観音が有名で、北陸地方にはすぐれた馬頭の作品が多くあります。孔雀明王は高野山の金剛峯寺に伝わる快慶の作品で、これもよく知られています。私は金大に来る前は高野山に住んでいたので、この作品を見る機会も何度もありました。いずれにしても、以前、見たことのある作品をよく覚えているようで、いいことだと思います。授業を通して、そのような作品の背景をより詳しくすることができるはずです。

欧米と日本の庭を比較すると欧米では永遠性を求めて石を使い、日本では四季などによる移り変わりを大事にして木を使っているそうです。仏像でも石、木などの材料が使われていますが、このような考え方は反映されていますか？

基本的にそのとおりです。インドの仏像は金属や石が圧倒的に多いのですが、日本では木を用いることが一般的です。インドでは神や仏に永遠性を与えるのに対し、日本では、そこに時の経過を見いだすことが重要なようです。そのため、表面の装飾がはげてしまったり、破損したりしても、風情を感じるといった積極的な評価を与えます。中国や東南アジアなど、日本以外の仏教寺院では、あくまでも仏は神々しくなければならないので（仏が神というのは変な表現ですが）、金ピカに塗り替えています。日本人が見るとけばけばしく感じますが、逆に、それらの国の人が日本の仏像を見ると、みすぼらしく見えるでしょう。文化によって、聖なるイメージは容易に変化するのです。

今日は、インドの像と日本の像を対比して見せてもらいましたが、高校のときにはインドの像とかを見て、「インドから伝わってきたんだよ」ってふつうにのみ込んでいました。今日改めて昔にあの距離を越えたのはすごいことなんだなって思いました。やっぱり国ごとに色があるから、もとのインドのを日本に伝えるにしても、もっと仲介する中国色とか朝鮮色とか日本色がガッツリ出ててもおかしくないのになと思います。高い依存性にびっくりしました。私は後半に出てきた、似てないタイプのほうがおもしろいと思います。どうして立っていたものか、すわるのか、とか、ものの持ち方のちがいとか、どこに重点をおいて形をつくりかえるかとか、そこに伝わったときに介された人々の存在を感じられるので私はそれがおもしろいなと思います。（ほとんど）そのままのカタチで伝わっているのは本当にキセキのようなものですごいけど、それより仲介された文化色をうけついでいるもののほうに注目したいな、と思いました。

私が前回の授業で強調したこともそういうことです。仏像の伝播のあり方を、実例を示しながら紹介しましたが、一番言いたかったことは、それを伝えたのが「人間」だということです。何百年前の人間でも、それはわれわれと同じ人間なのです。指摘してくれているように、高校までの授業では、単なる知識として、「インドから日本に伝わりました」ということは学びますが、仏像は伝染病とかではないのですから、自然に伝わるはずがありません。それを伝えるために、想像を絶するような人々の努力があったはずです。そのような人たちの「思い」をどれだけ共有できるかが、このような分野の学問では重要になります。文化に対する理解もそれが基礎になると思います。

2012年5月25日の授業へのコメントと回答

この講義を聞いていなかったら、見過ごしてしまうような小さな変化が、よく見てみると面白いと思った。確認？なのですが、「金剛手は、神様に仲間入りしたくて武器→植物を持つようになった。」という感じで良いのですか？　金剛手は実在の人ではないのにそんなこびを売るようなことをしておもしろいです。これは、誰か彫刻家が、「よし！花を持たせて金剛手もみんなと仲間にしてやろう！」と思ってこのように変化させたのですか？　色々と論点と解釈が違っていたらすみません。

仏像でも、美術作品一般でもそうですが、ほんの小さな特徴から、その作品の本質を理解するためのヒントが与えられることがあります。美術史の有名な格言ですが「神は細部に宿り給う」（本当の真実は細かいところにあるのだ）というのがあります。授業ではそのようなポイントも指摘するようにしています。密教の仏たち（とくに菩薩たち）が植物を持つのは、おそらく観音が蓮華を持つことや、文殊が睡蓮を持つことに影響を受けたのだろうと考えています。これも画一化のひとつの例です。金剛手自身は、もともと菩薩のメンバーではなかったのですが、徐々に位が高くなり、菩薩のひとりとなってから、さらにその一般的な特徴である「花を持つ」ことを取り入れたのでしょう。彫刻家（インドの場合は職人なので、石工です）のアイディアかもしれませんが、このような仏の姿を考えついたのは、仏教の僧侶だった可能性もあります。瞑想をするときに、そのような金剛手の姿が現れたのかもしれません。このあたりは、今回の授業でも考えてみます。

人間は多くのことを考えたり、覚えたりするときに関連づけや共通点があるものをまとめるということをよくするが、仏像の画一化もその行動の結果ではないだろうかと思った。しかし、個性を残すという意志が同時に働いた結果、最低限の区別を残して他が一緒になったのではないかと考えた。

たしかに、そのように考えると、仏のイメージの画一化は人間の持つイメージ操作のひとつのパターンかもしれません。画一化が何をもたらしたのかということも、今回は取り上げます。

先週の授業で知っている仏像が出てきたことで、とてもテンションが上がって、家に帰って日本史の図表や仏像図鑑を４〜５時間眺めてしまいました。どうやら今日も同じ行動をすることになりそうです。私は、不動明王と広目天、広目天に踏まれている邪鬼、竜灯鬼が大好きです。先生は特に好きな仏像などはありますか？

それはうれしいです。授業の影響で仏教美術やその関係資料を自分から見るというのは、最も理想的な私の授業の受け方です。個人でも関係する文献などをお持ちかもしれませんが、図書館の大型図書のコーナー（開架も書庫も）には、たくさんの図書があります。また、私の研究室である人文学類の比較文化共同研究室（人社１号館３階）にも、大量の資料を揃えています。時間があるときにでも、どうぞ見に来て下さい。優しい先輩が、お茶を入れて歓迎してくれるでしょう。どの学類の方でもけっこうです。なお、私の好きな仏像は、秘密です。

ラーフラが「困難」を表すと何かで読んだんですが、「星」なんですか？　あと「菩薩」は世俗のものであるのにそこまで拝む対象とされるのはあまり理解できませんでした。シンボル化はこの前にも出てきていましたが、象徴的に表すことでより理解しやすくなると共に表現できない不完全性をカバーするためのものなのだろうと思いました。また、シンボル化することで伝達しやすいという利点もあるのだろうと考えました。

ラーフラは月蝕や日蝕を起こす神様で、大きな口をそなえた怪物のような姿をしています。両手に太陽と月を持っています。下半身はありません。このあいだは金環日食（金沢では部分日蝕）が話題になりましたが、古代のインドでは、ラーフラが太陽を食べてしまったと考えたのです（金環日食のように食べるのは、なかなかむずかしいと思いますが）。ラーフラに「困難」という意味はありませんが、「妨げ」という意味で理解されることもあります。お釈迦さんが自分の息子に、どうしてこんな名前を付けたのかはよくわかりません（出家の妨げになるとよく説明されますが）。菩薩はまだ悟りを開いていないのですが、その分、われわれに近いところで活動しています。悟りきった仏よりも、悟りを開くために努力し、さらには、われわれを救うために一所懸命なのが菩薩です。自ずと人気が高まるのも、理解できるのではないでしょうか。シンボル化のメリット、デメリットについても、今回の授業の前半で取り上げますが、指摘してくれた点は、いずれも正しいと思います。

なぜ画一化してしまうのかと思った。流行とかは、仏像の世界にあるのか気になった。流行で画一化してしまったのなら、今のアイドルがみんな同じに見えるような現象に似ていると思った。
まさにそのとおりで、仏像はAKB48なのです（意味不明？）。単独のアイドルよりも、いったい誰が誰かわからない、よく似た女の子が大量に出てくる風潮は、まさに画一化されたイメージの世界ではないでしょうか（皆さんは、区別がつくのかもしれませんが）。

仏像は全部似てると思っていたけど、本当に似せてきたりしてたんだなぁと思った。統一した条件をみたしたり、最終的に花で見分けたりして、あとは個性を消したりしていて残念だった。統一するとこは統一して、他は個性を出したら、もっと記憶に残る仏像が増えるのにと思った。
個性の喪失も、画一化のひとつの結果です。私はそれも、インドにおける仏教の衰退や消滅に関係があると考えています。イメージ戦略で負けたということです。

今日は菩薩の像をたくさん見たが、菩薩は、当時の人々にとってどのような存在であり、どのような位置づけをされていたのか気になった。仏は、悟りを終えた者であるから、像にしてありがたく拝む対象となりえるだろうが、菩薩は、まだ悟りを終えていない者であるのに、どうして像になったのか。像になったのは、仏となるために人一倍努力した見本となるような者だったのだろうか。しかし、それにしては、耳や首に飾りが多く何だかチャラチャラしているように見えて、厳しい修行に励んでいる者のようには見えない。
菩薩がなぜ人気が高いかについては、すでにお答えした通りです。「厳しい修行に励んでいる者」というイメージは、インドの仏像にはあまり見られません。ガンダーラの仏像に「苦行する釈迦」と呼ばれる有名な作品があります。骨と皮になったすさまじい姿の釈迦像なのですが、これはガンダーラにのみ見られる作品で、インド内部にはまったく類例はありません（ガンダーラはインドの西北部で、インドから見れば辺境です）。インド人にとって崇拝の対象、言い換えれば、聖なるものの姿は、完全無欠とか、この上なき美しさといったイメージなのです。痩せこけた姿はそれとは正反対です。どのようなものに聖なるイメージを感じるかは、その国や時代によってさまざまなのです。ちなみに、苦行する釈迦は日本人にはけっこう人気があります。日本人にとっての聖なるもののイメージによく合致するのでしょう。

2012年6月1日の授業へのコメントと回答

密教仏のイメージと制服の話を聞いて仏像は拝む対象であるのに、統率される人たちと重ねられるのはなんとなくおかしい気がしました。また聖なるものは写実的な形をとることを拒むときいて、西洋では写実的なものが求められていたと思うので、この差はどのようにして生まれるのかと思いました。

おそらく皆さんの多くが、同じように、なぜ、仏が統率されなければならないかと思ったのではないでしょうか。一般的な仏のイメージは崇高で近寄りがたく、あるいは慈悲深くありがたい存在です。しかし、密教では仏は単に礼拝の対象ではなく、修行者が一体となるべき対象なのです。しかも、マンダラのように、膨大な数の仏たちを相手に、そのような実践を行う必要があります。その場合、仏たちがてんでばらばらのイメージをしていたら、収拾がつかなくなってしまいます。画一化され、シンボルのみで区別されるイメージは、修行者にとって、おそらく管理しやすいイメージなのです。このことは、もう少し先ですが、「マンダラとは何か」というテーマの時に、ふたたび登場するので、記憶にとどめておいて下さい。西洋と東洋で写実的なものに対する姿勢が異なるのは、歴史的な事実だと思います。ただし、ひとことで写実的と言っても、さまざまなパターンがあります。たとえば、ルネッサンスの時代の絵と、印象派の絵、さらに20世紀のキュービズムの絵を比べれば、そのあまりの違いに驚かされます。それぞれ、何が写実的であるか（そもそも絵とは何か）という観点が異なるのです。このことも、マンダラの時にふれますが、皆さん自身でも考えてみて下さい。日本の絵画についても検討してみるといいでしょう。

イメージの画一化によって、個性の喪失と意味機能の低下がもたらされ、全体が没個性的になったといいますが、私はそれが悪いことだとは思いません。なぜなら、個性的な仏像よりも、没個性的な仏像が多数ある方が、昔の人々が幸福を祈願した思いが痛いほど伝わってきて説得力があるからです、私は本当に仏像が大好きで、見ると本当に癒されます。どうしてこのような気持ちになるのかは分かりませんが、表情や雰囲気、すべての要素が私の心をくすぐります。

私も、イメージが画一化されるのはマイナスであっただけではないと思います。もっと必然的な理由や背景があったと考えています。AKB48のようなアイドルグループを例に出したのも、そのためです。インド仏教の場合、仏たちがグループ化することで、仏教は最後の光芒を放ちますし、チベットやネパールなどに伝わった後も、ずっと長く生き続けます。イメージを画一化することで、全体としてのイメージが定着し、時代や地域を越えて受け継がれていったのでしょう。ただし、イメージを画一化すること、いいかえれば、制服を身に付けることによる個性の剥奪には、恐怖も覚えます。学校の学生、戦争における兵士などを例に出しましたが、ナチス・ドイツのヒットラー・ユーゲントや、中国の文化大革命における紅衛兵（こうえいへい）のように、常軌を逸した殺戮を行うのは、いずれも制服に身を固めた若者たちでした。集団の一員と化すことで、思考を停止してしまうことがよくあるのです（しかもそれは若者に多いのです）。さて、仏像がお好きということで、授業の内容も楽しんでもらえると思いますが、ぜひ、図書館などで、ご自分でも本を見て下さい。もちろん、実際に寺院を訪れ、本物の仏像と出会うのもいいですね。必要ならばアドバイスをします。

おシャカ様の三十二相（？）でしたか、それを聞いたときに「わーぉ、フィクション感まんさい！」と思っていましたが、思っていたより現実に即した仏のつくり方をしていたんだな、と思いました。私も絵を書いたりして、キャラクターをつくったりしますが、特徴的につくりつつ、でも現実に即した「ありえる」ものをつくることをめざしたりします。なんか、仏をつくった人たちのつくり出す葛藤が感じられたようで、あんまりかわらないんだな、と思っておもしろかったです。仏を、身近なものにするために、画一化をすすめたのですね。以前はもっと拝み奉る感がすごかったのに、なんか商品化されちゃってるみたいに感じました。広隆寺の半跏思惟像好きです。

実感のこもったコメントでうれしいです。仏教美術を身近なものと感じるというのは、この授業の狙いなので、願ってもない感想です。私自身のスタンスですが、異文化理解のポイントは、驚きと共感だと思います。「こんなにすごいんだ」という驚きと、「わかる、わかる」という共感です。それが相手の文化を尊重することにもつながると思います。その逆は、無関心と拒絶でしょう。そこから民族対立や戦争が起こります。

仏が増える理由の話の中で、仏の名前はお経の中に書いてあるとおっしゃっていましたが、お葬式とかの際にお坊さんがよむお経でも、仏の名前があったりするのでしょうか。まさか、密教におけるイメージの画一化のから、「全体をコントロールするには、イメージの画一化が必要」という人間の心理が見られるとは想いませんでした。ある事象から、人の心理にまで迫るという考え方が興味深いと思いました。

人の心理に迫るにはいろいろな方法がありますが、歴史的な事象から探るのも普通に行われます。それはさておき、日本の場合、お葬式の時に唱えるお経は宗派によって異なりますが、北陸に一番多い浄土真宗の場合（日本全国でも、一番ですが）、浄土三部経（阿弥陀経、無量寿経、観無量寿経）と、親鸞が書いた「正信偈」（しょうしんげ）、そして、蓮如による「お文（ふみ）」（あるいは「御文章」）になります。この場合、いずれも仏の名前の列挙はあまり含まれません（浄土三部経の一部に、お経を聴く聴衆として、菩薩や仏弟子などの名前がたくさんあげられます）。その他の宗派の場合も、経典は異なりますが、やはりそれほでたくさんあげられているわけではありません。仏の数が飛躍的に増えたのは密教の時代で、そのときの経典は、日本では葬式や法事などで唱えられることがないのです。この他に、仏名経というジャンルの経典があり、これは逆に、仏の名前をひたすら挙げている経典です。平安時代にはこの経典を唱えるという仏名会という法会（仏教の儀式）がありました。清少納言の『枕草子』にも登場します（第七十六段）。

マンダラを作る時に新しい仏が必要になると聞きましたが、それでは人数合わせのように思えます。本当に信仰心を持っていたのかどうか疑問に思いました。それと、仏像を見ていて思ったのですが、顔や手がいくつもある人間は気味悪く思われて、仏像に顔や手がいくつもあるとありがたく思われるということで、人間は仏に対して恐れのような気持ちも持っていたのかなと思いました。

本当に人数あわせです。足りないときは、新しく生み出したり、別のグループから寄せ集めをすることもあります。後代になると、いちいち集めるのがたいへんなので、まとめて全員、新しい顔ぶれにすることもあります。仏に顔や手が多いこと（多面多臂と言います）が、かならずしも気味悪さを感じさせないというのは重要な指摘だと思います。人間は神や仏などの聖なるものに、特別な形（いわば畸形）を許してしまうのでしょう。そのよ

うな人間のイメージのとらえ方に、私は興味があります。もちろんそこには「おそれ」（恐れ、畏れ、懼れ）があるのですが。

私も『平清盛』は見ています。CASTで少し不満もありますが、私はおもしろいと思うので、なんであんなに批判されているのかわかりません。１ヶ月位前の話で清盛がお寺を建立して、曼荼羅に自分の血で赤く塗るところがあったと思うんですが、あれは演出ですか？　本当にあったことなんですかね？
『平家物語』が伝えるエピソードです。ドラマでもあったように、鳥羽法皇の命により、清盛は金剛峯寺（和歌山県の高野山にある真言宗の総本山）の再建を行います。これはいわば大規模な国家事業で、清盛がその総監督兼、財政責任者になったのです。曼荼羅は金堂にかけられるために制作されましたが、そのときに、胎蔵曼荼羅の大日如来の宝冠に、清盛が頭の血を混ぜたといわれています。そのため、この曼荼羅は「血曼荼羅」という名称を持ちます。ドラマでは父親の忠盛との争いで流れた血で描いたことになっていますが、これは脚色です。なお、血曼荼羅は金剛峯寺の霊宝館（高野山の博物館です）の至宝のひとつで、この夏にも展示される予定です。機会があれば、拝観してみて下さい。夏の高野山は涼しくておすすめです。

仏像の画一化が進んだのは仏の教えが多いほど力が強いという考えから、だんだん絶対的な力をもつ神様が１人いるという考えに移っていったとは考えられないのか、と思った。
そういうこともあります。大乗仏教や密教では無数にいる仏たちを統括するような、「仏の中の仏」のような絶対的な存在を生み出しました。毘盧遮那如来（東大寺の大仏がそうです）や大日如来です。このような特別な仏の前では、一般の仏たちは、何ら特別な存在ではなく、その他大勢になってしまいます。そのような仏たちが、個性を持つ必要などないのです。

5月25日の授業へのコメントと回答を読んでいて思ったのですがラーフラが両手に太陽と月を持っているというのは阿修羅との類似点のように思えるのですが、この２つの仏に関連性はあるのでしょうか？　あと、マンダラを構成するときに分かりやすくするためにシンボルだけを描くというのは本来、信仰するはずの仏を省略していて本末転倒のような気がします。信者からすると信仰する対象がハッキリしていれば、姿形はなんでもかまわないということなのでしょうか。
この授業ではじめに取り上げた阿修羅について、よく覚えていてくれました。そのとおりで、ラーフラが阿修羅（インドではアスラ）のひとりと見なされることもあります。ラーフラが太陽と月を手に持つのはインド以来ですが、阿修羅は中央アジアからそのような作例があります。ラーフラのイメージが阿修羅に反映されているようです。シンボルを描くことについては、前回の授業でも説明しましたが、密教の修行者たちは仏のイメージを生み出すために、シンボルを用いました。ダイレクトに仏そのものを思い浮かべるのではなく、はじめに核（あるいは種）のようなイメージとしてシンボルを瞑想し、そこから仏のイメージに成長させていきます。シンボルを正確に区別して、認識することは、瞑想における必要条件だったようです。

とても初歩的な質問なのですが、密教とはどこからが、何を基準にして密教なのでしょうか。インドで「仏教」としては特に“秘密”にする必要はなかったように思います。仏教の宗派というより仏教から派生した宗教なの

ですか？　瞑想によって仏のイメージが生み出されるのであれば、修行僧が仏師でもあった場合、自らが見た仏の姿を作ってしまえば、それがそのまま「仏」として扱われるようになったのでしょうか。もしくはそうした実例はあるのでしょうか。もしそうだとしたら、画一化される前のイメージはそのようにしてできたと言えるでしょうし、そうなると修行者はみな自分が見たイメージを何らかの形で残していったことになりますよね。

「密教とは何か」というのは、私の授業では、当然出てくる質問です。ただ、それを授業ではあまり正面切って取り上げません。密教の説明をするよりも、実際の現象（仏たちや儀礼）から、イメージをつかんでほしいと思っています。それでも、多少は説明が必要なので、ごく簡単にしておきますと、７世紀ころからインドでさかんになった仏教の一形態で、とくに大乗仏教の発展した仏教です。壮大な仏たちの世界（パンテオン）を持つことや、儀礼を重視すること、瞑想やヨーガなどの身体技法を通して悟りに到達すること、その教えを師から弟子へ秘儀として伝授することなどが特徴としてあげられます。インドでは密教に相当する言葉はなく、真言乗（しんごんじょう）とか金剛乗（こんごうじょう）などと呼ばれていたようです。大乗仏教の一形態としてとらえられていたのです。インドでは13世紀の初頭にほぼ仏教は滅亡しますが、その伝統、とくに密教の教えはチベットやネパールに受け継がれます。日本に伝わった密教はそれよりもはやいもので、中国を経由しています。真言宗と天台宗は、日本仏教の中の代表的な密教の宗派です。9世紀ころに伝わりました。

後半の質問も重要で、修行者や仏師が見た仏像が、そのままの形で作られたことがあります。たとえば、滋賀県の園城寺にある不動明王画像、別名、黄不動などはその代表です。しかし、この作品についても、実際に行者が見た姿がそのまま表されたのではなく、すでに存在していた別の仏像や仏画の影響が認められるという研究もあります。このあたりは、以前、私も論文に書いたことがあり、『仏のイメージを読む』という本に収録しました（ちなみにこの本の表示カバーでは黄不動を使っています）。

2012年6月8日の授業へのコメントと回答

◎前回の授業は、これまでの仏像や仏教の話からはかけはなれた（と思わせる）内容だったのですが、おもしろかったというコメントが多かったと思います。授業の途中と終わりに、いつもよりは長くコメントを書く時間を作れたので、内容の濃いコメントが多くありました。このようなテーマは、高校までの授業ではほとんどなかったと思いますし、あったとしても、現代文の哲学的な内容の文章や、小論文（脳や認識をあつかったもの）の練習問題とかだと思います。その場合、理解するだけで終わってしまい、自分自身の問題としては考えてなかったのではないでしょうか。仏教に限らず、宗教は「人間とは何か」「生きるとはどういうことか」という問題と直結しています。これは、皆さん自身の問題なのです。そして、それはきわめて哲学的な問題です。コメントにも「まるで哲学のようだ」というものがありましたが、宗教と哲学が別のものだと考えていること自体がおかしいのです。宗教といえば、うさんくさいとか、だまされると怖いというような漠然としたイメージしかない人も多いかもしれませんが、宗教を学ぶということは、人間や自分自身を知ることなのです。

***

宇宙のわかりやすいイメージは生命で、生命はまた宇宙となってその中に生命がいて…じゃあ宇宙を内とするさらに大きいものがあるのかなぁって思いました。私達は生まれた瞬間から死に向かっているのなら、宇宙もいつかは消えるのでしょうか。宗教学が地学的なことと結びついて科学者＝哲学的みたいに感じました。

宇宙が有限だとしても、その外にさらに無限の世界を人間は想像できるのですから、宇宙は無限に続いていくのでしょうね。無限が耐えられなくなると、そこに神などを登場させます。インド的な宇宙観では、宇宙もひとつの生命のようにとらえ、生滅（生まれることと死ぬこと）を繰り返すと考えます。このことは今回の授業でお話しする予定です。宗教学と地学や科学が近いことに、違和感を覚えるかもしれませんが、近代科学の発達は天文学や地学が基本になっていますし（ガリレオやニュートンを考えてください）、その前には神学や哲学があります。ガリレオとキリスト教会との葛藤などはご存じでしょう。すべての学問体系の基礎にあるのが、人間や世界に関する考察であり、宗教はその重要な要素です。

よく「私」とは何なのかを考えたりする時、透明人間も考えますが、僕はよく、「原子」を考えます。自分の事は「自分」と、なんとなくの認識はできても、じゃあ自分の中の細胞の中の物質一つ一つの原子、粒子まで自分と言い切れるかと問われると、僕には「自分だ」とは言いきれないなぁと。炭素、酸素、水素、窒素…だったら、机にも、野菜にも入っているから、自分と野菜はどう違うのかなぁと。ここまで書いて結局自分が何を書きたかったのかよく分からなくなりました。

それでいいと思います。わからなくなることを考えるのが人間の特権です。わかることだけを考えるだけでは、大学ではありません。なお、人間を物質に還元する考え方もありますが（授業でも暗黙の了解としてそのようなところから話をしました）、物質とは別に精神や霊魂を想定することも可能です。ヨーロッパではむしろこのよ

うな考え方の方が自然でした。身心二元論といいます。肉体が滅んでも、精神が永遠に生き続けるのです。皆さんの多くもそのように考えているのではないでしょうか。これも正しいか正しくないかはわかりません。

AKBの総選挙がらみですが、マンダラで中央に位置している仏は一番人気で、中央から離れて行くほどマイナーになっていくのですか？　最初に見たスライドの仏像は今まで見たものと全く違って見えました。目がきれいだったり、カラフルだったり、あと髪型もいろいろでインパクトが強かったです。それぞれ、歯を食いしばっていたり、悲しそうな目をしていたり、怒っていたりで、何を見て、何を思っているのかなと思いました。何が、どこまで自分なのかという話はとても難しかったです。だれが言っていたか忘れましたが、「チョウになっている夢こそが現実」というような話を思い出しました。

マンダラのときにお話しする予定ですが、そのとおりで、中央の仏が一番偉くて、あとはだんだんマイナーになっていきます。しかし、それと同時に、マンダラの仏はすべて中央の仏が分身のように生み出したという考え方もあります。中央の仏が宇宙そのものだからです（!?）。スライドショーの仏像である八大童子像（高野山金剛峯寺所蔵）にインパクトを受けたというコメントも多数見られました。わたしもこの作品はとても好きです。興福寺の阿修羅よりも、ずっとすごいと思いますが、ブームになるほどは知られていないです（その方がいいような気もしますが）。以前、高野山に住んでいるときに、近所にある霊宝館で、じっくり見る機会が何度かありました。国宝と同じ町内に住んでいるという贅沢な環境でした。最後の蝶は「胡蝶の夢」として知られる有名な荘子のエピソードです。Wikiなどでも紹介されていますが、図書館などで探して、原文を読んでみることをおすすめします。

せんとくんに元ネタがあるとは知らなかった。改めて問われると、私という存在は何とあやふやなものなのだろうと思った。前に本で、名前をつけるという行為は、連続したものごとに区切りをつける役割をしていると読んだことがあるが、“私”や“他者”という考えも、大きな全体の宇宙に区切りをつけるものなのだろうかと思った。人間が生から死へとプログラミングされているのと同様、宇宙にも“死”があるのでしょうか。先生は、宇宙の“死”についてどう思いますか？

名前をつける、あるいは言葉で世界を切り分けるという行為は、きわめて人間的なものです。人間が言葉を獲得していなければ、世界はまったく異なる様相を示していると思います。教科書でもジーニーのところで、小さな赤ん坊は、われわれとまったく異なる方法で、世界を認識しているのではないかと書いています。「言葉による世界の分節」という表現をとっている研究者もいます。宇宙の死についてですが、おそらくあるでしょうね。しかし、それは人間が生命の死のアナロジーとしてとらえているだけで（つまり、滅んでいるように人間にとって見えるだけで）、宇宙そのものが死んでいるのかそうでないかは、わからないでしょう。特定の現象をどのように解釈するかは、その主体に関わっているのです。仏教ではさらに、そのような宇宙の誕生や死を、すべて空（くう）としてとらえます。そもそも、存在しないものに、誕生も死もないのです。すごいでしょう。

今日の仏像とても素敵でした。今までの中で一番好きです。すごく、質感がしっかりしていて、肌もきめこまかくて、とくにはじめに映る２体が素敵だと思いました。今日の授業はいままでのものとはガラッと異なっていたものでしたが、今ここで、生きていると思われる「私」であると考えられているものが成立するのはとても危う

いことなんだな、と改めて思いました。「私」って何？　よく分からない。どこからが「私」？　よく分からない。でも確かに、今こうして思考している私は今ここにいるのです。ただのタンパク質の塊である、とも言えます。しかし、絶えず考え、喜び、哀しみます。「私」がどうやって成り立っているのかということは、私には自分でこたえは出せないですけど、常に考えなくてもいいけど、考えてなければならないことだと思います。私はこういうことを考えるのがとても好きです。考え得る生き物でよかったなと思います。不勉強でよく分からないのですが、このようなことに思いをはせようとする学問の領域は何なのでしょうか。教えて頂けると嬉しいです。教科書を読んで、改めて、私なりにもう一度考えてみようと思います。「私」は、これが「私」とは言えないですけど、「私」が確かに存在していることは、愛おしいほどの奇跡だと思います。今日改めてそう思いました。次回からの授業にどうつながるのかとても楽しみにしています。

長文のコメントをありがとうございました。感じるところが多かったようで、うれしいですし、これからもいろいろ考えてみてください。「私」や「人間」について考えるのは、おそらくすべての学問です。文系の分野をイメージするかもしれませんが、理学や工学、あるいは医学も物質的な側面や生理現象から人間を考えます。しかし、おそらく最もストレートに「私とは何か」を考えるのは、哲学でしょう。それをもう少し広げて、人間のさまざまな活動や文化、社会などについて考察するのが人文学です。経済学や法学は、さらにそれをそれぞれの領域に特化した分野です。日本の大学で文学部や人文学部（うちでは人文学類）が学部のはじめに置かれているのは、そのためです。これはヨーロッパにおける大学でも同様です（というよりも、それのまねです）。ただし、ヨーロッパの場合、哲学よりもさらに上位に置かれる学問分野があります。神学です。神についての学問は、人間に関する学問に先行するのです。

講義の最初に見た八大童子像の目が玉眼であると言っていましたが、あれらの像の頭部の構造はどうなっているのでしょうか。眼を中から入れるのだとすれば、頭部は空洞になっているのですか。仏像の造り方は基本的に同じだと思っていたので、目の部分一つをとっても違いがあることに大変興味を持ちました。

空洞です。この時代の彫刻は寄木造りが基本で、プラモデルのように、からだの部分を個別に作り、それを組み合わせてひとつの彫刻にします。玉顔は頭の内部から入れて、別の部材で固定します。赤外線やX線の写真では、その構造もよくわかります。八大童子については詳細な調査がなされていて、体内にいれてあるものが他にもあることがわかっています。

今日見た仏像は目力が違うな、と思いました。人間はエネルギーや神様の手を借りなくても、自分で自分に変化をおこすと言いましたが、そもそもプログラミング（遺伝子）を作ったのが神様のような存在だとは考えられませんか？

そのとおりで、人間の外に神を想定して、プログラミングの役割を与える考え方もあります。宇宙も同様で、宇宙が何らかの変化をしながら、存在し続けているのであれば、そのプログラミングの作者として、宇宙の外に神を想定することができます。キリスト教はこの立場です。この考え方はイメージはしやすいのですが、それではその神がいる空間は何なのか、そして神の身体やその意志はプログラミングされていないのか、と疑問は広がります。インドの場合、プログラミングされて変化している宇宙そのものが神だと見なす考え方が好まれました。はじめは違和感があるかもしれませんが、この方が、すっきりしているともいえます。

2012年6月15日のの授業へのコメントと回答

宇宙を表すuniverseは、uniが無限を表しており宇宙を表現するには我々は部分でしか表すことが出来ないとおっしゃっておりましたが、それと同じことが神という完全・無限な存在を仏像という形で表すこともまたただ大きい、手がたくさんある、顔が何個もあるといった、人間とは異なる一部分でしか表せないということにつながっているのだろうと思った。

そのとおりです。神（あるいは仏）と宇宙が同じであるとは、密教を含め、インドの宗教で広く見られる考え方です。神や仏のような超越的、絶対的な存在を、何か形によって表すことはできないということは、この授業のはじめの方で繰り返す述べましたが、そこと結びつきます。しかし、人間はそれでも何らかの方法で表したいという欲求もつねに持っています。無限で完全な宇宙をどのように表すかで、その文化のあり方が示されるのです。授業の内容をトータルに理解してもらえて、うれしいです。

「宇宙は１つであり、全てを包み、かつ無限である」。そう言われた時は「なるほど・・・」と思っただけですが、よくよく考えてみると、地球上であっても宇宙は宇宙であり、地球外を“宇宙”と呼ぶのは何か物足りないなと感じました。その点、何か西洋の「私」と、「他人」の思考が少なくともあるのではないかと思います。その考え方が悪いと言うのではないですけど、インドの地球（または自分らの住んでいる所）を含む宇宙の考え方が、なぜか私としては納得させられるものでした。不思議なものですね。２０００年以上前の理論が今の人間（少なくとも私）にもしっくり来るとは。

そこが文化の研究のおもしろいところです。前にも書いたと思いますが、文化研究の魅力は「驚きと共感」です。人間の二千年の歴史など、宇宙や地球の歴史に比べれば、ほんの一瞬のことです。人類が誕生してからの長さと比べても、微々たるものです。人間の基本的なあり方は、二千年程度ではそれほどかわらないのではないでしょうか。

インドの考える宇宙論の話をきくと、日本の考える宇宙はかなりボヤーッとしているんだなぁと思った。インドが幾何学的・規則的に世界をとらえているのなら、日本は世界をどうとらえているといえるのだろう。

授業の最後のスライドは、このあたりを意識したものです（ほとんど説明できませんでしたが）。基本的に、日本人には宇宙そのものの概念がほとんどないと思います。宇宙という言葉そのものが、明治以降の造語です。明治よりも前の時代でこれに近い言葉としては、「世間」かと思いますが、まったく異なるニュアンスです。もし、日本人が、自分を取り巻く「世界」のことをイメージするとすると、「自然」がそれに近いのではないかと思っています。山や川、海、などです。現在の言葉では「環境」でしょうか。ただし、「自然」という語も、本来は「じねん」と呼ばれ、また別の意味も持っています。少なくとも、幾何学的、規則的な構造は、日本人の世界観には完全に欠落しています。

インドの考えるはてしない時空を前にして、塵にもなれない私の悩みがなんだというのだろう。天女がおとずれる前に終わってしまう人生に、昔の人がどうやって救いを求める心を持ち続けたのだろうか。無限にのまれるだけの心に絶望しなかったのだろうか。

そのあたりは人によるでしょう。インドの宗教の持つ雄大さや悠久といったイメージは、インド文化を特色づけるものです。その一方で、インド人はきわめて現実的です。解脱や悟りを開こうとする人々もいれば、現実世界の世俗的な栄華を求める人もいます。このような多面的、あるいは相反的なあり方そのものが、インドの文化と見ることもできます。なお、無限に繰り返される輪廻からの脱却をめざしたのが仏教をはじめとするさまざまな宗教です。絶望だけで終わらないのもインドなのです。

数字で秩序立てされた仏教の世界観はとても美しいと思いました。他の国ではもっと具体的な私たちに身近なものを使って表したりしているけれど、数字という概念をもちだすことで形なく表しにくい宇宙をわかりやすく表していると感じました。ところで、何故世界を表す花、というか仏教でよく登場するのは蓮なんでしょうか。インドでよく咲いているとか、そういう単純な問題でしょうか。

ハスについては今回の配付資料で、以前に私が書いた文章を紹介します。インド、とくに仏教で最も重要な植物がハスです。はじめのころに見たサーンチーやバールフットなどの古代の仏教美術から、最も好まれたモチーフの一つで、旺盛な繁殖力や、水の中から伸びる清らかさなどが強く意識されているようです。観音をはじめとするさまざまな仏が手にすることからも、ハスへの強いこだわりが感じられます。今の日本ならハスではなく別の花、たとえば桜とかが、同じようにさまざまなイメージと結びついているのではないでしょうか。ヨーロッパであれば、バラとか。

個人的にブラームスは好きなので嬉しかったです。最初曲が流れてきたときに「仏像を見るのにレクイエム・・・？」と思いましたが、見てみると本当に合って聞こえたので驚きです。ふと思ったのですが、秘仏というのはなぜ秘仏とされているのですか？　見えない存在を拝む方が、目の前に存在があるよりも仏を自分のイメージの中で構成でき、より崇高でありながら近しい感覚が生まれるような気が個人的にはしましたが、単に「そうしなきゃ」という伝統なのでしょうか。今日の授業については全く想定外の宇宙観で、うまく理解できなかったように思います。どうしても無から何かが生まれるという考えはつかめません。何か作用させる外部要因があるように思います。

先週のスライドショーは観心寺の如意輪観音で、BGMはブラームスの「ドイツ・レクィエム」の第四曲でした。前日に仏像とBGMを選ぶのですが、いろいろ試してみて、私としてもよく合うと思い選びました。ブラームスの重厚なところは、どこか、仏像のイメージに通じるような気がします（クラリネット五重奏曲の最終楽章などもいいかもしれません）。秘仏については、いろいろな解釈が可能です。もちろん、崇高な存在なので、むやみに人に見せないというのが基本にありますが、それだけでは説明できないところもあります。逆に秘仏にすることによって、集客の効果をねらった場合もあります。観音の秘仏は33年に一度、御開帳をすることがあります。そのときに多くの信者が集まることはもちろんですが、西国三三か所のように、巡礼の一部に組み込まれると、一部の秘仏が御開帳になると、ついでに別の霊場を参拝するという効果もあります。現実的すぎて、興ざめな理由と思うかもしれませんが・・・。インドの宇宙観は「むずかしい」というコメントも多くありました。細

かいところを完全に理解する必要はありませんので、教科書の第二章を読んで、大まかなイメージをとらえて下さい。無から何かが生まれるというよりも、有も無もない世界が、変化を繰り返しているだけ（それもわれわれが変化と思っているだけ）なのかもしれません。

今日の授業最初の仏像は面白かった。特に目を細めた表情が印象的でした。最初見た時、この顔は何かがつまらないのかな・・・ほほえんでいるようにも見えるな、色んな感情が見えるなと思ったんですが、その後これは考えている所だと聞いて合点がいきました。ただ、何を考えているのでしょう？　望みを叶えるべきか否かなどと迷っていたりするのでしょうか？

スライドショーの如意輪観音は、皆さんがあまり知らないものを、と思って選んだのですが、よく考えると、高校の日本史の教科書にも載っている有名な作品でしたね。ただ、平安初期の密教美術の代表作という、教科書通りの説明で覚えている人がほとんどだと思いますが、細部をよく見て、その特徴を知ると、まったく別の世界が広がります。仏像に限らず、芸術作品の魅力もそこにあります。如意輪観音がほおづえをついていることについては、先週も少し説明しましたが、ロダンの「考える人」にも通じるポーズで、ヨーロッパでは「メランコリア」（憂鬱気質）と結びついていることでも有名です。北方ルネッサンスのデューラーが描いた「メランコリア」という銅版画もよく知られています。如意輪観音が何を考えているかはよくわかりませんが、当時の人々がそのポーズに何を託したか、それは、その他の地域の同じようなポーズとどこが同じでどこが違うのか、考えてみるとおもしろいです。

僕は理系で物理を学んでいるのですが、仏教が考える宇宙というものが、物理学で考える宇宙（ビッグバン）とまったく違っていて驚きました。しかし、よくよく思えば、物理学者は天体観測や、宇宙を構成する原子や素粒子を解明することによって宇宙論を立てようとしています。この物理学者の、法則を見つけ出して、つじつまを合わせていく行為は昔のインドの人と、同じことをしているんだと思った。

そうなのですね。学問の体系は、閉ざされた世界の中での整合性によって成り立っています。数学や物理学はその最たるものでしょう。しかし、現代の宇宙物理学などでは、そのような「閉ざされた世界」そのものの枠組みを問題にすることがあるようです。そのときに、仏教的な世界のとらえ方がクローズアップされることがあります。これは、仏教が現代科学を先取りしているというような都合のいい話ではなく、人間の思考のパターンには、それほど大きな違いがないということでしょう。

2012年6月22日の授業へのコメントと回答

私は授業のはじめにストゥーパは女性の子宮を表しているのかなと思いました。日本の古墳の内部にも子宮や産道を表している構造があり、死者が再びうまれかわることを象徴しているところがストゥーパと類似しているなと思ったからです。

ストゥーパが何を表しているかは、当時の人々の考えが残されているわけではありませんので、正解はありません。子宮でもいいと思います。卵と言ったのは、形が似ているのでわかりやすいと思ったからです。要するに、生命を産み出すなにかであればいいのです（もちろん、これも現代的な解釈です）。同時に、それが宇宙全体を意識していることも重要です。インドにおいては、宇宙と母胎とストゥーパが、イメージの上ではつながっているからです。古墳が子宮や産道と関係があるという指摘は、他の方にもありました。後の方のコメントにもあるように、沖縄のお墓にも見られるという指摘もありました。おそらく、死者儀礼や死者の祀り方として、死後の世界からの復活や再生を墳墓の機能とする考えは、普遍的にあると思います。さらに言えば、古代の宗教美術の主要なものは、墳墓のような死者と関わりのあるものです。エジプトのピラミッドはもちろんですが、中国の兵馬俑も有名です。死後の世界に対するこだわりですね。

講義の初めに鑑賞した菩薩半跏像は、上まぶたと眉の間の盛り上がる顔立ちや、髪束を装飾的に結い上げた様は独特で、印象に残りました。仏塔（ストゥーパ）が「母胎」であるがゆえに、仏像が造られても、仏塔は消えることはなかったのだと思いました。

前回のスライドショーの仏像は、一般にはあまり知られていませんが、仏教美術史上ではとても有名な作品です。はじめのころに紹介した向源寺の十一面観音と肩を並べる作品で、実際に、以前、東京国立博物館で行われた仏像展では、会期の前半と後半で、それぞれが展示の中心となっていました（展示替えで同時には見られませんでした）。凛とした顔立ちや颯爽とした髪型、そしてひときわ印象的な衣の表現は、著名な仏像の中でもとくに際だっています。BGMにはマーラーの５番の第４楽章のアダージョを準備したのですが、はじめは私の手違いでうまく音が出なくて残念でした。準備段階で試したときは、絶妙だったのですが・・・。ストゥーパが仏教の歴史の中で作られ続けたことの理由は、私自身はよくわかりません。ご指摘のように、母胎であり、増え続けるもの（あるいは、増やし続けなければならないもの）という基本的な立場は、かわっていないと思います。しかし、それ以前に、人は何か垂直に伸びるモニュメンタルなものが好きなのかなとも思います。スカイツリーは現代のストゥーパかもしれません。

今日の観音像は本当に顔のつくりが美しいです。すごくキレイな肌で、しかも衣も流れているようで、美しく、素晴らしいと思います。うごき出して、お話し出しそうです。インドの水に関わる話に感動しました。女性が水を現すということが納得されました。私は女子ですけど、月経とか全く隠すことでないと思うし、いっそう大切にすべきもので、されるべきものであると考えています。今日の女性のモニュメントを見ていて、うまく言えませんが、女性の大切な役割を、生命を生み出す大切なものとして扱われているのが素敵なことだと思いました。

私もそう思います。私は女性ではありませんが、生命を生み出すということの不思議さや、そのために生物が準備した信じられないほど精緻なメカニズムは、驚き以外の何ものでもありません。生物学ではよく知られた理論ですが、雌雄のある生物は、基本がメスで、オスはそれを助けるために（つまり、子孫を残すために）、無理やり作られたような存在だそうです。人間でも男性の平均寿命が女性よりも短いのも、役割を終えれば、さっさといなくなった方がいいからでしょう。オスというか男性はそんなものです。

前から思っていたんですが、玉眼や、黒い珠に使用されているのは何なんですか？黒曜石のような石と考えているのですが、合っていますか？　また、どのように入れ込むのですか？　仏塔の話は死生学をとっているので何となく知っている気になっていたのですが、私は仏塔はたまごよりも子宮のイメージだと思っていました。特に理由はないんですが、女性のお腹みたいな。沖縄の方でそんな遺跡？があったと思います。たまごだと何か物質的すぎて今までの抽象的な仏教世界観とは個人的に違うというか…。仏塔の上にたくさんのカサが描かれているのが分かった時は、すごく感動しました。学んでいなかったら何がなんだか分からなかった物が理解できるというのは素晴らしいことですね！　日本の仏塔は五重の塔のように屋根がいくつかついていたりしますが、それはカサ＝仏を表現しているというのは考えすぎでしょうか。なぜ日本はこのように表現したのでしょうか。

前回の宝菩提院の観音像の瞳の黒い珠については、配付資料にも明記されていないようです。黒曜石かもしれませんが、わかりませんでした（ご自分でも調べてみてください）。玉眼は水晶を用いることが多いようですが、ほかにもいろいろな宝玉が用いられたでしょう。玉眼は頭の内部から入れます。というか、玉眼が流行した平安末以降は、寄木造りが基本なので、部材を組み合わせる（「矧ぐ」といいます）ときに、あらかじめ、裏側から固定しておきます。卵と子宮については、上記のとおりです。ストゥーパの浮彫に見られたたくさんの傘は、私の解釈なので、当時の人々がそのように考えていた保証はないのですが、ストゥーパの表面に描かれたナーガなどとあわせて解釈すると、けっこう、すんなり納得できるような気がします。五重塔などの屋根と、この傘とを結びつけられればおもしろいのですが、おそらく、建築史学的に両者は別物だと思います。やはり、日本の多層型の塔の原型は、中国の寺院建築にあると考えるのが自然でしょう。ただし、多宝塔と呼ばれる形式（先週のスライドでは、金剛三昧院の例がありました）の場合、真ん中あたりにふくらんだところがあり、これがストゥーパの覆鉢部に相当するようです。

インドの人はとても早い時期に、ハスを生命の象徴ととらえ、そのハスを他の生命の象徴である女性や水と結びつけていたということに感動しました。あと、百万塔陀羅尼がストゥーパの日本版だったとは知りませんでした。「たね」は増えるというお話がありましたが、たねと言えば死生学でのラクタビージャは血をたねとして増えていました。生命と増殖の概念はとても深い関わりを持つのだなぁと思います。

共通教育の死生学（月・４限）を履修している人は、話が結びついてよかったと思います（履修していない人も、一応、わかるようにはお話ししていますが）。初めての方に簡単に説明しておくと、ラクタビージャというのはインドの神話に出てくる敵方の人物で、体から流れる血を種として、次々と自分の分身を作り出していく厄介な存在です。どんなに攻撃されても、体から血を流すことで、新しい生命を生み出していくのです。これを片付けたのがカーリーと呼ばれる女神で、体から流れる血を含め、無数のラクタビージャを呑み込むことで、増殖するのを防ぎます。カーリーはインドにおける女神のひとつの典型で、女神で母なる神でありながら、敵を容赦

なく殺戮する死の女神でもあります。血を飲むという行為は、増殖し続ける生命を自分の体の中に蓄え、それをコントロールすることを意味します。死をつかさどる女神が同時に生命を生み出す母なる神であるというのがポイントです。このあたりは、教科書の第２章でも取り上げているので、読んでおいて下さい。

卒塔婆の語源がストゥーパという話が教科書にありましたが日本の墓に置いてある卒塔婆から再生していく生命の感じはうけませんが日本の卒塔婆も生命を表しているのでしょうか？

日本の卒塔婆からストゥーパのイメージを読み取るのは無理です。卒塔婆の原型は五輪塔で、下から順に、立方体、球、四角錐などの石が組み合わされています。古い墓地などで見ることができます。卒塔婆は平たくて長細い木の札の形をしていますが、その上の方に、この石の形の輪郭線を見ることができます。五輪塔というのは地水火風空の五種の元素を象徴しているので、五輪塔と言います。五種の元素は世界を構成する最も基本的な元素と考えられていて、すべての物質は、最終的には五種の元素に還元されてしまうと考えました。人間も死ねば地に帰ると言いますが、インドではもう少し正確に、五種の元素になる（五大に帰す）と言います。ストゥーパが須弥山世界を基本とした宇宙のイメージで世界を表したのに対し、卒塔婆や五輪塔は、別の方法で世界を表しているのです。

無も有もない、という考えは分かるような、分からないような…でもいろいろと考えると、どんどん分からなくなりそうなので、あまり深くは考えないようにします。この考えをふまえると、０の概念って、ただ単にものが無いというだけではなくもっと深い意味がつめ込まれているのかなと思った。また、ストゥーパは卵の形を表している円形の建物なのに、漢字になおすと仏塔と“塔”が出てくるのを不思議に思いました。塔って先がとがっているイメージなので…。

インドでは哲学的な思考の一つに、すべてのものは存在している「実在論」というのがあります。そこでは、「無」も存在すると考えました。たとえば、机の上に何ものっていないということを、机の上に無が存在すると考えたのです。それは、たとえば、犬の無であり、猫の無であり、そのように数えていけば、世界中のありとあらゆる存在物の無になります。日本人にはおよそ考えつかないことです。しかし、仏教の「空」（くう）はそのような無ではありません。「無でも有でもない」というところは、この空のとらえ方と似ています（授業で紹介した文章は古代インドのウパニシャッド哲学で、空を説く大乗仏教の文献とはかなりの時代差がありますが）。塔は「卒塔婆」の真ん中の字が残ったもので、もともとは単独の言葉ではありません。塔が先がとがったイメージを持つようになったのは、明治以降でしょう。

今回の講義では、インドをはじめとした様々なストゥーパを見ることができました。外見の問題なのですが、インドとネパールのストゥーパはドーム形状である点がよく似ていると感じるのに対し、日本のストゥーパはかなり独特な形状をしていると思いました。奈良時代につくられたものであるからか、何となく法隆寺の五重の塔などを連想させる形でした。日本のあちこちにドーム型のストゥーパがある光景は想像するとおかしく見えますが、日本のストゥーパの形は、どこが水のモチーフなのかなどが少しわかりにくいので、ドーム状のストゥーパよりも若干メッセージ性が薄れていると思いました。

ドーム状ではないストゥーパは、たしかに本来のメッセージ性が失われていると言えますね。しかし、建造物というのは、ある種の必然性があって、しかも、実際に建てることができるという現実性も備えています。日本の塔が現在のような形態を取るようになった背景に、どのような文化や技術があったかを考えるのも、おもしろいことだと思います。

今日はストゥーパについてでしたが、古代インド人はすごいことを考えていたのだなあと思いました。“すごいこと”という表現は適切ではないと思いますが、考えが深いなあと思いました。ただ、この考えはインドの人々で話し合って誕生したのでしょうか。一口にインド人といっても、みんながみんな一致した考えではないと思います。このまとまった考えを形成するまで、様々な意見のぶつけ合いとかもあったのかなあなどと考えました。
たしかに、私も「すごいこと」だと思います。だから、授業で取り上げて、多くの人に知っていただきたいと思っています。ただし、当時のインド人のことを考えた場合、たぶん、意見のぶつけ合いはなかったでしょう。文化を研究したり、解釈するときには、当時の人々の考え方を知ることも大事ですが、当事者でも意識していなかったことを、われわれが読み取ることも大事です。「なるほど」とか「それはおもしろい」とか「目からウロコが落ちた」と思わせるところが、文化研究の醍醐味です。あくまでも恣意的にならないように、注意しなければなりませんが。

2012年6月29日の授業へのコメントと回答

最初に立方体の絵をかき、視点などの話がありましたが、実は私は家の間取図を見ているのが大好きなんです。建築会社の広告が入っていると、つい見入ってしまいます。間取図を見ながら、その家の空間を想像して、ここがいいとか、ここはダメかななどと考えるのはとても楽しいです。間取図は機械的な味気のない図ですが、それでも人によって感じ方や楽しみ方は様々だと思います。

実は私もそうです。昔からインテリア関係の本や雑誌を見るのが好きで、平面図の間取りから家の中を想像します。これは研究でも役に立ち、寺院のプランを見て、その内部を想像したり、壁画の配置を頭の中で再現したりします。このようなことは誰でもできると思っていましたが、同じような分野の研究者と話していたら、そういうことができないと言うのを聞いて、不得手な人もいるんだと驚いたことがあります。目に見えないものを空間的に再構築できるかどうかは、本人の資質によるようです。これができるようなら、建築学や美術史に向いていると思いますよ。

自分の幼稚園時代や小学校の時のスケッチブックが家にあるのでそれをたまに見ると「つなひき」と同じような書き方をしていました。小学校のときにそういう絵の書き方しかできなくて、友達が今の私たちのような視点で絵を書けていたのを「写実的に書けてうらやましいな。私もあんな風にうまく書けたらな。」と思ったことを思い出しました。

そのような経験をした人もたくさんいると思います。写実的と思うのは、そのような表現方法を見慣れているかどうかであって、ほんとうにそれが「ありのまま」であるわけではありません。そもそも、三次元のものを二次元、つまり平面に置き換えたのが絵画なのですから、どんな方法でも、一種のトリックがあるのです。

マンダラは富山県の立山にある博物館（？）でも見たことがあるが、こわくて凝視できなかった覚えがある。仏像は一色だから落ちついて、平和な気分でみることができるが、マンダラは鮮やかな朱色が特に強烈で、マンダラから大音量の音楽がきこえてきそうでこわかった。図は２次元だから３次元の仏像よりも見えない、分からない部分があるが、それでもマンダラがたくさん作られているということは、全て知る必要がないこともあるな、と思った。

［富山県］立山博物館のことだと思います。富山県出身の方の多くは、小学校や中学校のときにここを訪れたことがあるようです。立山博物館の重要なコレクションが立山曼荼羅です。しかし、これは曼荼羅とは言いますが、授業で取り上げている密教のマンダラとは、まったく異なります。とくに、地獄絵が画面の多くを占めているのが特徴です。正視できないのもそのためでしょう（実際はかなりカリカチュアされていて、怖いというよりも滑稽なのですが）。日本でマンダラがどのように変化したかは、私の研究テーマのひとつですし、参考書にあげた『マンダラ事典』の「6．日本のマンダラ」の後半は、具体的な作例からそれを述べています。立山曼荼羅も一項目を立てているので、図書館などで借りて読んでみて下さい。

中学校時代に美術部にいたのですが、写生の際に余計なものを除く（例えば社寺建築の写生からコンクリートや木の柱をなくす）ことを学んだことがあります。人物画にも、画家自身をモデルとした人物を配置したりするそうなので、必ずしも「ありのまま」ではないという考えには納得できました。

次の方もそうですが、皆さんの中には、かつて美術部に所属したり、今も美術部にいる人が何人かいるようです。絵が「ありのまま」ではないことを実感として納得してもらえてうれしいですが、さらに、実際に絵を描く人の立場からのマンダラの解釈の可能性などを示してもらえると、私も助かります。私は絵を見ることは好きですが、描くのはまったくできません。写真にはいくらか自信があるのですが・・・。

絵にたくらみがあるというのは、最初はそんなにないのではないかなと思ったけれど、いろいろな絵を見ていくうちに、たくらみを含んでいる絵がいっぱいあるなと驚きました。私は、中学・高校美術部だったので、絵を描く機会も多かったのですが、確かに、私も絵を描く前に「このことを伝えたい」という目的を持って描いていたのを思い出しました。「たくらみ」と聞くと難しそうに思えるけど、絵に描いて伝えたいことはどの絵にもあるのかなと思いました。

たしかに「たくらみ」というのはあざとい感じがしますが、要するに、画家の意図をいかにして伝えるかですね。どんな画家も、形によって何かを表したいという欲求を持っているはずです。そうでなければ、わざわざ画家になる必要はないのですから。

マンダラとキュビズムに共通点があるというのは興味深かったです。先生は冒頭のスライドで「最古の彩色マンダラ」と仰いましたが、色のついていないマンダラもあるということでしょうか。私は、絵画を見る際には、その絵が描かれた背景やその時代を知ることが大切だと考えています。絵の機能までとはいかずとも、少しでも画家の意図を読み取ることができると思うからです。それはマンダラをはじめ、宗教美術にも言えることだと思いました。

日本におけるマンダラの歴史については、教科書を参照して下さい。そこにも書いてありますが、日本に残る最古のマンダラは、高雄曼荼羅と一般に呼ばれているもので、空海と同時代です。空海が唐からもたらした曼荼羅と同系統であることも重要です（請来本系といいます）。これは彩色本ではなく、紫綾紺地に金泥と銀泥で描かれています。基本的には線描です。西院本は、これとは別の系統ですが、彩色本としては最古になります。請来本系で最古の彩色マンダラは、高野山にある血曼荼羅です。コメントの後半の絵画を見るときのポイントはそのとおりで、それが美術史的な研究の基本になります。絵とは「読み解く」ものなのです。

今日初めてイントロでマンダラを見て浮かんだことが「極彩色」という言葉です。この例えがふさわしいか否かは分かりませんが。まるで絵本を見ているみたいでした。加えて、自分の中でやっと「生きている」ような仏達に出会えた気がします。それこそ、色が鮮やかだからそう自分の中で考えているだけかもしれませんが、あのようなマンダラに出会えて何だか重苦しい感じが取っ払われた気がします。しかし、こう感じてしまうのも平安時代のマンダラを描いた人の「企み（策略？）」に引っ掛かったからでしょう。それほど、１０００年前の絵に影響力があると感じました。ただやはりマンダラを「神々しい」とか「ありがたい」とだけ思っても、マンダラには少々可哀相な気もしますね・・・。

先週のスライドショーの西院本の胎蔵曼荼羅は、日本のマンダラの中でもとくに有名な作品です。30年ほど前に豪華写真集（たしか100万円ほどしました）で出版されたときは、仏教美術の専門家以外、たとえばグラフィックデザイナーや写真家、建築家など、一流のアーティストの人たちに大きな衝撃を与えました（写真は有名な石元泰博によるものです）。この作品を見たら、強烈な印象を受けるのが当然なのです。授業ではマンダラをありがたがるだけではだめと言っているので、それと矛盾するように感じるかもしれませんが、日本の曼荼羅のすぐれた作品は、圧倒的な迫力を持っています。それは「神々しい」という形容詞がぴったりです。

私はヴァイオリンを習っていて、今日のロッシーニの曲を弾いたことがあります。けっこうマイナーな曲なので、まさか大学の授業で聴くとは思いませんでした。ロッシーニの曲は明るくてかろやかな楽しい雰囲気ですが、マンダラの神聖な感じとも調和していて面白かったです。マンダラに描かれている仏は神聖ですが、なんとなくどこか楽しげな印象を受けました。（あざやかな色で描かれているからということもあるのでしょうが・・・。）
それはおどろきです。授業では「知っている人はいないでしょう」などと豪語していましたが、失礼しました。マンダラによく合う曲というのは、なかなかむずかしいと思っています。何にでも合うバッハは別にして、少し軽めの曲の方が、マンダラの持つ重厚さと調和するような気がしました。おそらくモーツァルトも大丈夫だと思いますが、ベートーヴェンやマーラーなどでは重すぎるでしょう。別のジャンルになりますが、ジャズも合うかもしれません。ご自分でも試してみて下さい。（この項、まったく授業の内容とは関係ありませんが）。

先週のコメントに対する回答を読んでいて少し思ったのですが、遺跡とか思想に表れるように、昔の人の女性というか母胎に対して、生命を産み出すもの、大切なものという考えがあるのに、キリスト教では男性の骨から女性が作られて、男尊女卑のような考えになっているのが不思議に思いました。絵というとリアルな方が良いというような考えや、絵＝ありのまま、という考えが無意識のうちに存在していたんだな、と思いました。私はルネサンス期の宗教画が好きなのですが、今日のスライドを見て、仏教の絵もいいものだと感じました。あと、今から考えると、子供の頃のものの見方の方が実はすごいんじゃないかと思えてきました。
私もルネッサンス期の美術は好きです。イタリア・ルネッサンスもいいですが、北方のデューラーとかもいいですね。西洋と東洋の美術は、別のものとしてとらえられがちですが、宗教美術という点では、キリスト教美術も仏教美術もおなじ範疇でとらえることが可能です。実際、キリスト教美術を分析する視点は、仏教美術の研究にも役に立ちますし、その逆も同様です。ちなみに、金沢大学の人文学類は、その両者が学べるところで、日本の大学でもそれができるところは、それほど多くはありません。

今日は様々な絵画を通して、作者の視点の意図を読みとくような授業でとても楽しかったです。「つなひき」の絵で、子供の視点では人物が逆様に描かれていて、それは子供なりにつなひきの様子を表現する最善の策だったのではないかと思います。エジプトの壁画でも、女性が顔は横向きなのに手足の方向が変だったりしますが、それは私達から見ると違和感を覚えるけれど、昔のエジプトの人々は現にそのような視点で人間を見て、それが長い間受け継がれたのだなと思います。現代の辞典などで魚を調べると、全て顔が左向きに描かれていて、思考停

止とはちょっと違うかもしれませんが、それが「当然のこと」として思い込んでいるから、違和感なく画一的になるのかなと思いました。

コメントを読んで、有名な美術史家のR.　ゴンブリッチという学者の名著『芸術と幻影』に掲載されている、古代エジプトの「美術教室？」を描いたカリカチュアを思い出しました。人間はいかに対象を枠にはめて見ているかが、こっけいに描かれています。この本は美術史と心理学の接点のような領域を扱ったとても刺激的な本です。ぜひ一度読んでみてください。

2012年7月6日の授業へのコメントと回答

授業のコメントに対する回答に載っていた、R.ゴンブリッチの『芸術と幻影』にすごく興味を持ちました。ぜひとも全容を見たいので、探してみます。今日の講義は「儀式におけるマンダラの機能」でしたが、マンダラは家であること、家をたてることは宇宙創造に等しいことなどを知り、刺激を受けました。私は儀式とは何なのだろうと考えてみたのですが、お祈りやパーティーのようなことはもちろんですが、日常とは違う“非日常”を意図的に作り出すことで、現実世界よりもより高い次元の世界に足を踏み入れることなのかなと思いました。地獄絵図の先生の解説がとても面白かったです。

『芸術と幻影』は図書館の開架のところにあるようです。ぜひ、読んでみてください（少しむずかしいと思いますが）。私も１冊持っているので、見つからないようでしたら、お貸しします。マンダラと儀礼については、前回がその前半で、今回、後半になります。マンダラの形態を理解するためには、その機能、つまり儀礼でどのように用いられるかを知らなければならないというのがポイントです。儀礼を自分自身の言葉で定義したり、説明しようとするのはとてもいいことです。「日常と違う非日常を作り出す」というのは、儀礼の的確なとらえ方です。「日常と非日常」というような二項対立は、宗教学でも重要な概念で、「聖と俗」とか「ハレとケ」というような概念もあります。私自身は、仏教美術だけではなく、仏教儀礼も専門としています。最近刊行した『インド密教の儀礼世界』という著作でも、そのはじめの方で「儀礼とは何か」という考察を行っています。あわせて読んでみてください。これも図書館にあります。

教科書を読んでいたら、マンダラは設計図ととらえるとよいというようなことが書かれていたが、今日の説明を聞いていると本当にマンダラが設計図のように描かれていることがわかった。マンダラの中に鹿が描かれていたが、奈良の東大寺にもいて鹿が様々な国で古くから神の使いとして考えられていたのかなと思った。また、マカラもストゥーパから日本のマンダラにまで描かれていて仏教が少しずつ変わりながらも変わっていないところもあることがわかった。

そのつもりで見ると、マンダラはそれなりにわかりやすく描いてあります。当時の人々にとっては、もっとも合理的な設計図だったのでしょう。奈良の鹿については、春日大社の神様のお使いというのが一般的な理解ですが、マンダラに描かれている二頭の鹿は、中央の法輪とセットになっていて、初転法輪の象徴です。チベットの仏教寺院では、マンダラと同じように、入口の上部にこのシンボルが飾られています。マカラについては授業の中でもたびたび紹介してきましたが、ご指摘のとおりで、インドの初期の仏教美術の伝統が連綿と続いていることの例となります。ストゥーパとマンダラの構造上の類似点にもなります。

砂マンダラは今まで教科書等で見たものと比べ非常に色鮮やかで現代風だと思いました。頭をくっつけて制作する姿は職人。地鎮祭を行ったあとはどうするのですか？　そのまま放置するのですか。今の日本でも結界をはるように行っているのは日本人のおもしろい習慣だと思います。餅投げは関係ありますか？

職人というのはそのとおりです。チベットでは砂マンダラを作るのは芸術家でも何でもありません。普通のお坊さんです。それも、マニュアル通りに砂を落とすだけの仕事なので、下っ端のお坊さんの仕事だそうです。２，3年修行をすれば、やらせてもらえるそうなので、挑戦してみませんか？（強くは勧めませんが）。マンダラ制作儀礼で行う結界（地鎮祭に相当）は、一連の儀礼の最後に対応するプロセスがあります。今回取り上げる灌頂の後、全体の儀礼の終結部で、結界を解除します。それによって、それまで固定されていた魔たちが解放されます。これはマンダラをこわす作業と一体で、儀礼のために作り出した特別な空間が、日常的な空間にもどるプロセスです。マンダラのような特別な空間が、われわれの生活空間と同居するのは、ありえないのです。日本の地鎮祭はどうなのでしょうね。おそらく、結界は解除されないと思います。餅投げは、そのままではありませんが、儀礼の終了後に、お坊さんや関係者を接待することに、おそらく対応します。日本では「お斎（とき）」などと呼ばれます。

砂マンダラを作って壊す一連のVTRを見たことがあります。その時「えー、もったいない！」と驚いたと同時にスッキリした感覚も湧いた感じがしました。人間は秩序だったものを維持したい、美しい物を守りたい本能と秩序が続くと苦しくなり破壊したくなる暴力的欲求が生まれてくる気がします。

その気持ちもよくわかります。すぐ前の回答にも書いたように、日常的な空間に特別な空間を、つねに置いておくことはできませんし、次にマンダラを制作するときに、すでに別のマンダラがあったのでは、「宇宙開闢の儀礼」が行えないことになります。しかし、それでもマンダラをこわすというプロセスは、普通の人にはとてもインパクトが強いようです。今回のスライドにその写真もあります。

マンダラが家をあらわす設計図だったとは・・・。　高校の頃は、仏がいっぱいいるありがたいもの、くらいにしか教えてもらわなかったし、そのように思っていたので、驚きました。間違っているかもしれないのですが、結界を張って空間を区切るというのは、少し前にやった他者と私とか私と外の区切りに近いようなものを感じました。

「仏がいっぱいいるありがたいもの」という理解でもいいのですが（前々回の配付資料でも、私自身がそのように書いています）、マンダラのさまざまな秘密？を知ることで、まったく違ったように見えてくるのではないでしょうか。「私と他者」については、私自身はあまり意識していませんでしたが、たしかにそうですね。マンダラが世界を表してて、それが閉ざされていることを強調しましたが、われわれの身体も、細部はともかく、一個の閉ざされた世界となっています。

チベットのマンダラを立体的に作ろうという試みには共感できます。家を表すならば実際に家にしてしまわないのかと自分も思いました。ただ内部がわからないのは本末転倒です。チベットの立体マンダラは中に入ることができたり、何らかの方法で中身がわかるようになっているんでしょうか？

普通の大きさの立体マンダラは、せいぜい１ー２メートルの大きさなので、中にはいることはできません。入口から覗く程度です。しかし、チベットや中国には、寺院全体を立体マンダラのように作ることがあります。北京の北東にある承徳という町には、そのような寺院で有名なものがあります。そこでは、寺院の内部が巨大な楼閣

になっていて、中央には等身大の仏が安置してあります。一般の観光客は中には入れさせてもらえませんが、十分人間が入れる大きさです。このあたりも、リアリズムを好む中国やチベットの人々の感覚でしょう。

映像と音楽が私にはミスマッチなように思えてしまいました。鬼の表情は確かに罪人を殺している時の鬼の表情はコミカルなようにも見えますが、私としては目を見開いて必死に殺しているようで、その必死さが徹底しすぎて恐く感じました。見慣れると鬼も可愛く見えるんでしょうか・・・。頑張ってる感じはにじみ出ていましたが。授業では単に前例があるから、というようなニュアンスで出てきましたが、マカラは仏教でどのような役割を持つのですか。あと四方の門の存在意義もよく分かりませんでした。あそこを通しての移動というのはあるのでしょうか。地鎮祭が密教儀礼だったというのは驚きです。普通に神道だと思っていました。さすが日本、という感じですね。

音楽については、賛否両論でした。軽快すぎて悪趣味のように感じた方も多いのでしょう。しかし、地獄絵だからといって、荘重な音楽や、暗い音楽というのも安直な感じがするので、あえて、反対のイメージにしてみました（チャイコフスキーの「悲愴」の最終楽章などでは、絶望的な気分になって、耐えられないでしょう）。門についてですが、マンダラには必ず入口があります。授業でも触れるつもりですが、これは重要なことで、しかも、その入口の門はつねに開かれた状態で表されています。マンダラは灌頂という儀式の中で用いられ、弟子が生まれ変わる仏の世界を表します。したがって、マンダラに描かれた仏たちの宮殿は、弟子がその内部に参入する空間です。灌頂の儀式の中で、阿闍梨（弟子の師）につれられた弟子は、マンダラの四方で順に礼拝し、その都度、阿闍梨はそれぞれの門が開かれたことを宣言します。一見閉ざされているように見えるのですが、その内部に入るのにふさわしいものには、開かれているのです（実際は外から見るだけですが）。地鎮祭の起源については、そのうち詳しく調べてみたいと思っていますが、神道の儀礼の中には密教儀礼の影響を受けたものも多く、建築儀礼もそのひとつです。

私は意外と地獄絵を見るのも好きです。罪人たちはけっこう必死の形相をしていますが、鬼のおもしろがっているような、楽しんでいるような表情を見るのが楽しくて、今日のスライドショーはとてもひき込まれてしまいました。昨日習ったことなのですが、学問の中で、最も古い学問が３つあって、神学・医学・法学なんだそうです。その中でも、神学は最も古くに始まった学問らしいです。仏像とか、曼荼羅とか仏教美術だけを見ても、仏教ってとても奥が深いなあと感じるし、今までの授業を通してもそう感じることが多々あるのですが、神学は、最も古い学問だと聞くと、それだけの歴史を持っていて、多くの人々に受け入れられてきたものなので、奥が深いと感じるのもあたり前だ、と改めて思いました。

ヨーロッパの中世の大学のことかと思いますが、そのとおりです。神学と哲学がセットの場合もあります。大学に文学部を含む複数の学部があるときには、かならず文学部がはじめに置かれます（受験案内などで気がついた人も多いと思います）。そして、伝統的な大学（旧帝大など）では、さらに文学部の内部の講座の順序として、哲学がはじめにあげられます。これもその伝統をふまえたものです。しかし、キリスト教系の大学（上智大学や南山大学など）では、文学部よりも前に神学部が置かれます。人間の学問である哲学よりも、神についての学問の方が上位にあるのですね。

今回は、チベットのマンダラを多く見ましたが、立体マンダラはもちろん、どのマンダラも色がとても鮮やかでとても美しいと感じました。よく見ると、どのマンダラでも、四角い楼閣の部分が赤・緑・白・黄の決まった色で描かれていますが、チベットでは何か意味があるのでしょうか？（というよりも、平面のものも砂のものも、構図的には全く同じマンダラに見えるのですが、チベットのものはインドや日本のもののようにバリエーションがないのでしょうか。）

よく気がつきましたね。背景の色は、中央の四角い区画（宮殿を表します）は対角線で区切って四つに分けられます。ここは例の須弥山の四方の色に一致します。須弥山の四方の側面は、それぞれ異なる宝石でできていると考えられ、その色が地面の色に反射しているそうです。また、その周りの円で囲まれた部分との間は、黒っぽい色が多いです。これは世界全体を表す蓮の花の花托の部分に当たります。このように、マンダラの背景の色も、インドやチベットではきちんと説明されているのですが、日本に伝わったマンダラでは、そのようには塗られていません。その頃はまだ整備されていなかったのか、伝播の途中でわからなくなってしまったのか不明です（前者のような気がしますが）。

宇宙は家で円で球で蓮の花で・・・なんとなくわかったけど難しい・・・。そしてマンダラは家、ならマンダラは宇宙？の設計図？　結局宇宙ってなんなのだろうー？？

何なんでしょうね。私もわかりませんが、当時の人々がそれをどのようにとらえていたかを、マンダラを中心に考えています。世界をどのように表すかという問題は、私たちは世界とどのような関係にあるのか、そして、私たち自身が何であるかを考える糸口になります。何百年も前のインドの人々の考え方であっても、われわれに十分理解できますし、思いがけない類似点を発見することもあります。単なる懐古趣味ではないのです。

2012年7月13日の授業へのコメントと回答

はじめに

試験ごくろうさまでした。評価は出席にもとづく平常点とあわせて総合的に行うので、それほど心配なく。

＊

さて、毎回、授業への質問や感想を書いてもらいましたが、最終回の前回の出席カードには、未知の世界にふれることができたというものが、かなり多く見られました。この授業のテーマは「密教美術の世界」でしたが、授業で紹介してきた作品は、ほとんどの出席者の方が、はじめて見るものだったと思います。半期の授業を通して、いくらか親しみが感じられるようになったのではないでしょうか。この授業ではインドの密教美術を、具体的なイメージを通して知ることを目指していましたので、それなりの効果があったと思っています。また、インドとの比較として日本の密教美術もできるだけ紹介してきました。インドの密教美術に結びつくような作品が、身近なところにもあることに驚いた方も多かったのではないでしょうか。

この分野では「より深く見ることの難しさ」と「イメージを追うことのおもしろさ」があります。知識が増えるにしたがって、同じように見ていながら、それまで見えなかったものが見えてくるということが実感されるはずです。作品は現に存在するのですから、それを見ているという行為は同じなのですが、背景となる知識にしたがって、見えるものが違ってくるのです。同じ作品のスライドを何度かお見せすることがありましたが、そのたびに、別のものが見えてくることを実感することもあったのではないでしょうか。

授業でもくりかえし強調していましたが、マンダラを中心にまとめたことで、いろいろなトピックがつながりを持つことに気がついたことと思います。大学入学前の勉強では、問題と解答が一対一で対応しているのがあたりまえだったと思いますが、学問というのはそれほど単純なものではありません。問題設定や視点を変えることで、いくらでも答えを出すことが可能です。どの答えで満足するかは、問題を見つけるわれわれ自身が決めることなのです。

この授業の科目名は「宗教学」で、副題も「仏教学」でしたが、はじめにお断りしたように、宗教学入門や仏教学概説という内容ではなく、密教美術といういささか特殊なテーマで講義をしました。これは私の専門分野でもあるのですが、教科書的な概論よりも、専門性の高いテーマから、学問の魅力を知っていただきたかったからです。まとめで示した大きな問題、たとえば「聖なるもののイメージ」とか「世界とは何か」というものは、そのような意図から出されたものです。これらの問題は、美術の分野よりも、宗教や思想、哲学など、人間の存在そのものを扱う学問にかかわります。そして、そのことを自覚してもらえるように、いくつかの問題を提起しました。たとえば、対象をありのままに表現するとはどういうことか、対象に最もふさわしい表現方法は何か、さらには、世界とはどのようなイメージでとらえられるか、「私」とは、生命とは・・・などです。

＊

授業では出席の確認もかねて、質問や感想を出してもらいました。自分や他の人の感想などを読んだり、それへのコメントを読むのを楽しみにしていた方も多かったようです。毎年のことですが、全般的に質問の内容も回を追うごとにレベルが上がっていきました。大学の授業でも共通教育の講義は、ほとんど一方通行で終わってしまうのですが、これによっていくらかは双方向のコミュニケーションができたと思っています。書いてもらった

質問や感想をできるだけ紹介したかったのですが、10人程度が限界でした。出席者数がだいたい120人程度に落ち着いていたので、倍率はおよそ12倍となり、紹介できなかったものも多かったのですが、かならずすべて読んで、できるだけ授業に反映させるようにしていましたので、ご了承ください。

「仏教は奥が深い」という感想はできるだけ避けてくださいとはじめにお願いしましたが、ときどきありました。たしかに「仏教は奥が深い」のですが、学問というのはすべて「奥が深い」ものですし、「底が浅い」ような学問は、まだ掘り下げ方が不十分なのです。むしろ、どのような点について「奥が深い」のか、どことどこがつながることによって、「奥が深い」と感じるのかを、さらに考えてほしいと思います。実際、この授業は共通教育の授業なので、それほど立ち入った議論や、いろいろな考え方は紹介しませんでした。これらについては、学部や大学院の授業で取り上げています。私の所属する人文学類や、他の文系学類の方は授業などを通じて、またお話しする機会もあるでしょう。それ以外の学部の人も、本や出版物などで、これからも接する機会があればと願っています。図書館や生協の売店にもすでにいくつか並んでいるので、機会があれば手に取ってみて下さい。

＊

授業のはじめに行っていた仏像や仏画のスライドショーも比較的好評だったと思います。これまでの高校までの授業では、仏教美術は日本史などの授業で名称を覚えることで終わっていたと思いますが、ひとつひとつの作品について、知っておくべきことや語るべきことがたくさんあります。そして、それ以上に、作品をじっくり見ることの楽しさや喜びを、多くの人が感じたことと思います。はじめのオリエンテーションでお話ししたように、「美しい」とか「ありがたい」というありふれた感想だけで終わってしまっては、作品やそれを生み出した人に申し訳ないのです。なお、BGMをいろいろ凝りましたが、意外にしっくり合うという感想が多かったようです。音楽も美術も古典と言われるものには、同じ芸術として、通じるものがあるのでしょう。基本的には、私の趣味なのですが、共通教育の授業では、このくらいのお楽しみの時間があってもいいのではとも思っています（他の先生の授業では、あまりない趣向だと思います）。

＊

スライドショーやパワーポイントの画像は、お分けすることができるので、希望者はUSBのメモリーなどを持ってきて下さい。自分のパソコンでじっくり鑑賞してほしいと思います。もちろん、本物を見るのが一番いいので、博物館や美術館、あるいはインドに直接出かけていってもらえるとうれしいです。詳しい情報も提供します。

＊

ここからはいつもと同じ「コメントと回答」です。最後の授業ということもあり、全体を通しての感想も多く見られました。比較的、好評であったコメントが多かったと思いますが、もちろん「よくわかりませんでした」というような感想もありました。それでも、何かは得るものがあったことと願っています。

本物のマンダラを見てみたいとずっと思っていました！　夏休み見に行きます！　今日の講義は、教科書を読んで色々と勘違いしていました。宗教は人間がつくり出したものなのに、すごく深いと思いました。自然科学も「すごーい！」って思うことが多いですが、宗教も同じくらいその発想と仕組みに感動します。
感動していただけるのが何よりうれしいです。基本的に、学問の本質は「驚きと感動」だと思います。それは自然科学でも人文科学でも同じです。私も自然科学の本を読むと、けっこう感動する方です。それはともかく、われわれ人間にとって、もっとも興味深い存在が、人間そのものです。人間の思考や想像力は、宇宙を超えることすら可能なのですから。宗教が扱うのも、人間であり、宇宙であり、それを超えるもの（たとえば神）なのです。

灌頂の仕組みが興味深かった。目隠しをしたり、智水を頭に注いだりして、鏡で儀礼を受けるものに自覚される、しかし、仏にはなれず、仏の一歩手前の皇太子になる、というのも不思議だと思った。今までの授業は、絶対いつか役に立つと思うので、その機会が来たら、他の人に説明してあげたいと思う。
灌頂を国王の即位儀礼ではなく、その一歩手前の立太子の式に対応させるのは、これまであまり言われてこなかったことなのですが、儀式をつかさどる阿闍梨（すなわち先生）を仏とみなすことから、必然的に導かれることと考えています。このあたりのことは、教科書でも説明しているので参照して下さい。授業の内容については、私自身は、すぐにはそれほど役に立たないと思いますが、「私とは何か」とか「宇宙のイメージ」などは、ぜひ他の人に語ってあげてほしいと思います。役に立つか立たないかはともかく、基本的に、共通教育の私の授業は、専門分野以外の方にも「いつまでも記憶に残る授業」であってほしいと思っています。

マンダラが儀礼において、重要な役割を果たすことが分かった。確かにマンダラがあると、儀礼の際に具体的イメージが可能になり仏になるという自覚を持つことが容易になると思う。友達にマンダラって何？　と聞かれても最低限答えられそうです。半年間、ご指導ありがとうございました。
こちらこそ、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。上記の回答に加えて、「つい、他の人に語りたくなる内容の授業」というのも、いいですね。

今回の授業は分かったような分からないような・・・。仏とは一人しかいてはいけないものなのでしたか？　また、日本の敷マンダラとは宗教的にいいんですか？　砂の方は最後に壊すことで儀式が完成している気がするのですが巻いてしまっておくというのはちょっと・・・。この授業は毎回知らない世界を知ることができて良かったです。特にそれぞれの考え方がつながった瞬間はとても！！　フィールド文化考えているので、受けてみてよかったです。
前回の授業の最後の「まとめ」の時間は窮屈になってしまい、少し残念でしたが、その分、教科書をよく読んでおいて下さい。他にも『マンダラ事典』という本も出しています。ここにも簡潔な説明があります。仏は基本的に、一つの世界に一人しかいません。たとえば、阿弥陀の極楽浄土にお釈迦さんが居候（いそうろう）していたりしてはまずいのです。宇宙にはただ一人しか仏はいない（というか、宇宙全体が仏である）という考え方もありますが、曼荼羅や灌頂では、そこまでは求められていません。敷曼荼羅はおそらく中国から用いられたと思いますが、中国人の合理主義によく合っていたのでしょう。砂マンダラはチベットで受け継がれましたが、インド

では仏教以外の宗教、たとえばヒンドゥー教などにもよく似たものがあります。インド的な儀礼空間の生み出し方なのでしょう。このあたりにも文化の違いを感じます。人文学類のフィールド文化学は、私自身の所属のコースですが、もちろんおすすめです。何よりも、カバーする領域の広さが人文学類でダントツです。いろいろなことに関心がある人は、とりあえず２年生のときにフィールド文化に入り、そこからさらに専門領域をじっくりしぼっていくことができます。

運慶のスライドとても好きでした。後期になると良く知っているものも出てきましたが、私はわりと初期の作品も好きで、二童子立像などは表情豊かで面白かったです。玉眼が入るとやはりよりリアルで迫ってくるものがありますね。マンダラの話は最後まで聞くとすごくしっくりしました。仏教について全く知らないところから授業に入ったので、驚きの連続でした。純粋にほとんど先入観が無く授業を受けられたので、楽しみつつ深く考えることができたと思います。ぜひ他文化との比較の中で見ていきたいです。

「驚きと感動」を味わっていただいたようで、よかったです。スライドショーも同様で、運慶の作品の多様性をはじめて知ったというような感想も多く見られました。仏教の先入観はなくてよかったと思います。変な思いこみなどない方が、授業をしている方もやりやすいです。

現代で曼荼羅を見る場合は、縦にかけた状態で見るのがほとんどですが、本来は下にしいて儀式を行うという一種の舞台装置だということが分かって新鮮でした。灌頂瓶に入っている水は何か特別なものなのでしょうか。例えばオリンピックの聖火はアテネで採られた火が使われているそうですが、灌頂に使う水の場合はどうなのでしょうか。四月の時には考えもしないほど深いことを学べた気がします。ありがとうございました。

灌頂瓶に入っている水は、はじめは特別なものではないのですが（昔なので、井戸などで汲んだ水だと思います）、儀礼の中で、天上世界に流れる河の水に変えます（瞑想の力でです）。密教というのは、日常的なものを特別なものに変えてしまう宗教です。聞いたことがあると思いますが、加持祈禱といいます。

今までマンダラを見た時、「いろいろぎっしり書いてあるなぁ・・・」としか感じていなかったのですが、“儀礼”ということを知って、きちんと知ることによって、全く異なった有意義な見方ができるのだなぁと思いました。仏教は、高校でも少し勉強したし、新しいことはそんなにたくさんないかな・・・と思っていましたが、むしろ新しいことばかりで、仏教により興味をもてました。私自身、アジア地域に興味を持っているので、仏教は大事なポイントになると思うし、とりあえずテストがんばります！　楽しかったです！　ありがとうございました！

アジアに興味をお持ちというのは、とてもうれしいです。一般の日本人、とくに大学生くらいの若い人で、アジアに興味を持っている人は少数派だと思いますが、ぜひその興味を持ち続けて下さい。日本もアジアの一部ですが、日本以外のアジアのことを、日本人はほとんど知りません。インドも中国も東南アジアも、その他の国も、びっくりするような、そしてすばらしい文化を持っています。それを知ることで、逆に日本の文化の特殊性や普遍性もわかります。

今日の授業は、私の中で一番おもしろかったです。特に「法雲地」の話のくだりはすごく興味深くて、知恵がふりそそぐという考え方は楽しかったです。最初は仏像に少し興味があるというだけでこの授業をとりましたが、この授業をとって良かったと思います。ふつうに博物館や美術館で作品を見るだけでは分からない裏側を知ることができ、これから作品を見る目が変わると思います。

うれしい感想です。ぜひ、興味を広げていって下さい。作品を見る目は、どんどん成長し続けます。それまでとは違った世界を見ることができるのは、快感です。

この講義全体を通して、密教に対しての見方が180°変わりました。仏像を鑑賞するだけだと思っていたので・・・。この講義を受けなければきっと一生知らなかったであろう世界に触れることができて良かったです。また機会がありましたらよろしくお願いします。夏休み、せっかくなので近場ですし展示会行ってみようと思います。

同様に、うれしい感想です。石川歴史博物館のマンダラ展は、ぜひお出かけください。招待券もまだありますので、授業の終わりにでも声をかけて下さい。私の研究室に取りに来てもらってもいいです。今回の特別展はネパールやチベットの、それも近年の作品が多いのですが、詳しい説明のパネルがあります（一部は私が担当しました）。また、この特別展に合わせて、日本のマンダラの展示コーナーも作ってあります。これもなかなか通向けのおもしろい作品が並んでいます。